

エゾノハシ



2013春季号104

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

2013年3月25日発行 104号

春季号

- ・巻頭文 驚きの地球II (第4期の北海道) 会長 春日 順雄
- ・「北海道ボランティア・レンジャー協議会」のみなさんから学んだこと
自然ふれあい交流館 扇谷 真知子
- 1 平成25年度 第28回 定期総会日程、今年度事業、研修事業(十勝、鶴川、様似道北)、小樽支部の活動計画
- 2 自然観察会、自然観察などから
 - ・「最少年が体験、森のリラックス効果」 札幌市 平沢 芳史
 - ・毛無山登山植物観察会(25/2/23) 小樽市 林 東洋
 - ・アリで2時間観察 千歳市 宮本 健市
- 3 研究、観察、保護、登山などから
 - ・自然について 苫小牧市 えのきどかつみ
 - ・古代人の智慧に思う 札幌市 高松 文雄
 - ・桜雑感 札幌市 三輪礼二郎
 - ・沈黙の春、再来 江別市 大表 順子
 - ・キツリフネの増殖計画 登別市 内田 尚志
 - ・札幌市南区周辺の自然 江別市 千葉 到
 - ・地球環境問題の逆転の発想 札幌市 川床 博康
 - ・遊歩道について 礼文町 新山 彦司
 - ・台湾玉山 恵庭市 小林 英世
- 4 連載
 - ・森林浴の勧め 苫小牧市 谷口勇五郎
- 5 資料(オウハンゴウソウ防除など)、事務局便り、その他

編集後記

驚きの地球Ⅱ (第四紀の北海道)

春日 順雄

今年度のボラレン忘年会は27名の参加がありました。始めの挨拶、乾杯後は出し物や余興なし、締め乾杯まで、それぞれに賑やかにおしゃべりを楽しんでいました。

私は小樽支部の北嶋さんに、「観察会の時、古勝納川の事を話していたよね。昔、海岸線が130メートルほど低かった頃、今の祝津の方まで流れていた。」と、話していたよね。北嶋さんは、「ヴェルム氷期さ。今でも海底(大陸棚)に川の痕跡がある。水質のいい地下水が流れていて、小樽奥沢の北の誉酒造、運河沿いにある田中酒造はそれを使っている。いい水あるところに、美味しい酒ありさ。」と、話しておられました。

ヨーロッパアルプスの氷河研究から、第四紀(地球の地質年代区分のこと)になってから四回の氷期と三回の間氷期があったこと、現在は、間氷期にあると言うことが分かってきました。氷期は古い方から、ギェンツ・ミンデル・リス・ヴェルムと名付けられています。日本でも高山に残るカール地形の研究から氷期があることが分かっています。リス氷期に対応するのが、トヨニ氷期とポロシリ氷期です。ヴェルム氷期に対応するのが、日本飛驒氷期とトッタベツ氷期です。

この様な厳しい気候環境の中で、現在の人類の直接の先祖といわれる、ホモ・サピエンス・イダルトウが、約16万年前、東アフリカに生活していました。

第四期は氷期と人類の時代だと言われます。地質や生物の生活痕としてたどることが出来る範囲になりますから、調べてみると面白く、観察会にも役立つことでしょう。

1969年忠類村でナウマンゾウの化石が発見されました。この化石が含まれていた地層に含まれる花粉分析と、この地層の上に10万年前の屈斜路羽幌火山灰があったことから、約12万年前のものだとされています。復元されて北海道開拓記念館に展示されていますのでご覧になっていることでしょう。

マンモスゾウの歯が襟裳で発見されています。歯があった地層の上に支笏火山の軽石層があったので4万年前以上昔の氷期に北海道に渡ってきたものと考えられます。1990年石狩低地帯(石狩から苫小牧へぬける低地帯)の東側にあたる由仁盆地の水田地帯の地下の砂礫層からマンモスゾウの白歯の化石が見つかりました。これも支笏火山起源の火山灰などを手がかりに4万年前のものと考えられました。(『札幌の地質』p172より)

マンモスゾウが北海道を闊歩したのは、5万年～2万年前と考えられています。

ナウマンゾウやマンモスゾウと一緒に北方系の動物と、それを獲物として狙う人間も北海道に渡ってきています。遠軽町教育委員会発行の『黒曜石物語』に次のような記述があります。「遠軽町には旧石器時代(今から2万5千年～1万年前)の遺跡が数多く所在します。中でも白滝地域は旧石器時代の遺跡が集中します。白滝地域の遺跡の特徴は、良質で豊富な石器の材料となる黒曜石の原産地が隣接するため、石器制作を行った大規模な遺跡が形成されていることです。」と。白滝起源の黒曜石は、遠くサハリン・シベリアにも及んでいますから、遙か大昔の氷期のころ大きなスケールでの人々の交流があったわけです。

約4万年前支笏カルデラの噴火がありました。「膨大な火砕流が、石狩低地帯の中～南部を埋めました。現在の石狩川は江別で湾曲して石狩湾に注いでいますが、この火砕流が堆積するまでは、低地帯の南部へ流れ、太平洋に注いでいたと考えられています。」(『江別の自然を訪れる』P4) 吹き上げる噴煙、そして、周囲に大量に噴出した大火砕流、石狩川

の川筋の変化など、この時代に生活した人々も動物たちも大天災におののいたことでありましょう。

本州と北海道が陸続きになった氷期もあったのですが、ヴェルム氷期の時は陸続きになりませんでした。北海道と本州の動物相の不連続線である「ブラキストン線」について「ファウラのブラキストン線特集号」には、次のように出ています。2万年前のヴェルム氷期の最寒冷期には海面が現在よりも130メートル下がったと推定される。間宮海峡の水深は、10m～20m・宗谷海峡は、30m～60m・津軽海峡は、140m～450mである。ですから津軽海峡は開いていた。そこで、「北海道+大陸」と「本州+四国+九州」の動物相が出来た、と。

ヴェルム氷期の頃の気温は年平均で現在より7～8℃も下がりました。海岸線も現在より100mから最大130mほど低かったと考えられます(諸説あり)。この頃の川の痕跡が大陸棚に残されているそうです。ヴェルム氷期の最盛期には森林地帯が、約1500m下がっていたといわれます。これは植物帯が緯度にして7～8度、南にずれたこととなります。平野でいうと北海道は全域がツンドラ、東北～関東が針葉樹林帯、それ以南が落葉広葉樹林帯、九州南端以南が常緑樹林帯ということになります。

5000～3000年前頃、第4期完新世の気温最温暖期が訪れます。この頃、海面は現在よりも数メートル(4mから10mまで諸説あり)程度高かったと考えられています。日本の縄文時代に相当します。縄文時代の貝塚は弥生時代の貝塚より内陸側で発見されます。海面上昇があり海岸線が内陸にまで入り込んでいたからです。この頃のことを縄文海進といいます。

縄文海進の頃の江別周辺は、「約6000年前には、海水面は今より3mほど高く、石狩湾が江別にまで深く入り込んでいました。野幌丘陵からも間近に海が眺められたことでしょう。」(『江別の自然を訪れる』P4より引用)

釧路市地域資料室編『新版釧路湿原・釧路新書』p52には次の記述があります。「長い氷河時代が終わると、気温は徐々に回復してきた。それに応じて海面も少しずつ上昇してきた。海水は満潮のように、古釧路川をひたひたと満たし、そして内陸へ、湿原へと向かって逆上ってきた。第四期に入ってから三回目の海進で、縄文海進と言われるものである。9千3百年前になると、急激に気温が上昇して、海水は広く、奥深く湿原域に入り、六千年前頃には湿原全域を覆い尽くすほどであった。広い海灣を造り、また、谷へも入っていた。縄文海進は古釧路川などに沿って入って、初めは狭い海であった。だが、湿原域にあった台地は、それを造る地層(洪積層)が軟らかかったため、波はたやすく削り、そして海食崖を造って、海を大きく広げていった。沖積層の基底には、深さ30mほどの平坦なところが広く見られる。これは波食台(海食台)と呼ばれ、波が陸であった台地を、平に削りとった海底跡である。」(同書は、釧路在住の佐々木文雄さんから戴いたものです)

ここで紙面が尽きました。沢山の事を割愛しました。

札幌市の南西に連なる手根山・藻岩山・空沼・札幌岳などの誕生。支笏カルデラの噴火とフツシ岳の噴火・恵庭岳の噴火・樽前山の噴火・洞爺カルデラや屈斜路カルデラの火山活動・羊蹄山の噴火と誕生など、第四紀の北海道は驚くべき大変動をしています。そして、その変化の痕跡が私たちの目の前に展開しているわけです。北海道の第四紀の地質変動は興味をそそる領域です。

「北海道ボランティア・レンジャー協議会」の皆さんから学んだこと

自然ふれあい交流館 扇谷真知子

自然ふれあい交流館に指定管理者制度が導入され、管理運営を(財)北海道開拓の村が行うことになり、村の職員であった私が交流館にやってきたのが6年前のことでした。それまでの私はというと、道東の田舎育ちで比較的自然が豊かな環境で過ごしていたとはいえ、野外活動の経験はほとんどなく、自然とはほぼ縁の無い生活を送っていました。恥ずかしながら、交流館に来るまで野幌森林公園の遊歩道を歩いたことがなく、野幌が貴重な公園だということも全く知らない、そんなレベルだったため交流館での仕事は目に触れるもの聞くことすべてにおいて、ちょっとしたカルチャーショック状態でした。

勤めるにつれ、毎日のように散策している方もいれば、専門家並みに自然に詳しい方もおり、野幌森林公園が地元の方を始め大変多くの方に愛されていることを肌で感じていくようになりました。時には専門的な質問もされることもあり、ハラハラドキドキの連続でした(今もですが…)。こんな私が今日までなんとかやってこられたのも、ボラレンさんの存在を抜きにしては語れません。というのも、交流館と共催の観察会前日にはボラレンさんと下見を行っていますが、この下見が私の貴重な勉強の場となりました。ボラレンさんの幅広い見識や専門的な知識などに感動し驚きつつも、話はひたすらメモして頭に叩き込んでいきました(忘れていくことも多いのですが…)。本を読むだけでは分かりにくいことも、野外で実物を見ながら説明を受けることによって、まさに生きた授業となりました。本当に貴重な経験だと思っています。

さらに、毎回思うのが、皆さんの「飽くなき探究心」の凄さです。誰かが疑問に思っ話題提供をすると、ほぼ回答や見解なりが実体験をもとにしたエピソードとして語られます。それでも奥深い自然界のことなので明確な回答が出ないこともあるのですが、皆さんは次までに調べておくとか、今日は来てないけどあの方に聞いてみたら分かるかもしれないなど、不明なことをそのままにしないで疑問ととことん向き合うという姿勢には本当に感服します。

私はボラレンさんと活動していくなかで、本当に多くのことを吸収させてもらいました。とりわけ、皆さんが見聞きしたこと、経験したことを押しつけるのではなく、感動や喜びを共有すること、本当に心から自然との触れ合いを楽しむことなど、自然への深い愛情が伝わってきます。この姿勢は、今の私に計りしれない大きな影響を与えてくれました。本当にありがとうございます。

まだまだ力不足のため色々ご迷惑をおかけすることと思いますが、今後ともよろしく願いいたします。

平成25年度 第28回定期総会日程

日時 平成25年4月20日(土曜日) 13:00~16:30
会場 札幌エルプラザ2階 環境研修室1・II
受付 13:00~13:30
研修会 13:30~15:10
総会 15:15~16:30

《研修会》

演題「美への気づき 醜への気づき ニューエコロジー」

ロンドン大学教育大学院国際大使

英国環境管理評価協会教育部代表

日本心理学会認定心理士(心理相談員)

理学博士

環境教育学博士 井口 博貴 氏

博物館学修士

《定期総会》 司会進行

(出席・委任状・総会成立確認)

1. 開会
2. 会長挨拶
3. 来賓紹介と来賓挨拶

北海道環境生活部環境局自然保護課生物多様性保全グループ主査
自然ふれあい交流館館長

黒田 勝巳 様
氏家 等 様

4. 議長選出と議事録署名人の選出
5. 議長就任挨拶と議事録署名人の紹介
6. 議事

1号議案

- ・平成24年度事業報告
- ・平成24年度決算報告並びに監査報告

2号議案

- ・平成25年度事業計画(案)
- ・平成25年度収支予算(案)

7. 議長退任
8. 閉会

《連絡事項》

懇親会 「北のささや」 北区北7条西1丁目
NSSビル地下1階 18:00~

北海道ボランティア・レンジャー協議会 平成25年度観察会・研修会

月	行事名	実施月日	下見	集合・解散場所	備考
4	平成25年度総会・研修	20日(土) 13:00~16:45		札幌エルプラザ2F 環境研修室	
	春の花を見つけよう	25日(木) 10:00~12:30	24日(水)	交流館集合・解散	共催 昼食持参自由
5	セイヨウオオマルハナバチ防除	7日(火) 10:00~12:30	担当者のみ	開拓の村入口 エゾムラサキツツジ	主催 会員限定
	春のありがと観察会	12日(日) 10:00~14:30	11日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	共催 昼食・ごみ袋・ 軍手持参
	恵庭公園観察会	19日(日) 10:00~12:00	18日(土)	恵庭公園駐車場集合・ 解散	主催 昼食持参自由
	三角山登山観察会	26日(日) 10:00~14:00	25日(土)	森花会館登山口集合・ 解散	主催 昼食・飲料持参
6	十勝研修	1日(土)~2日(日)		帯広市	主催 会員限定
	森の新緑観察会	9日(日) 10:00~12:30	8日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	共催 昼食持参自由
	北広島レクの森観察会	23日(日) 10:00~12:30	22日(土)	北広レクの森・駐車場	主催
	アポイ研修	29日(土)~30日(日)		アポイ研修センター	主催 会員限定
7	鱈川研修(未定)	12日(金)~13日(土)		むかわ道の駅 四季の 館	主催 会員限定
	道北研修(層雲峡・白滝)	20日(土)~21日(日)		黒岳ロープウェイ駐車 場	主催 会員限定
	オオハンゴンソウ防除	28日(日) 10:00~12:30	担当者のみ	自然ふれあい交流館 集合・解散	主催
8	夏の森の観察会(瑞穂の池)	8日(木) 10:00~13:30	7日(水)	開拓の村集合・解散 記念塔(昼食)	共催 昼食持参
	秋の花でにぎわう森を歩こう	8日(日) 10:00~14:30	7日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	共催 昼食持参
9	きのこ研修会	18日(火)or 19日(水)	日程未定	道民の森・月形入口	主催 会員限定
	芸術の森観察会	6日(日) 10:00~12:30	5日(日)	芸術の森入口 バス 停留所前集合	主催 昼食持参自由
10	秋の森の匂いをかごう	10日(木) 10:00~14:30	9日(水)	開拓の村集合・解散 (交流館昼休憩)	共催 昼食持参
	北海道ボランティア・レン ジャー養成研修会	25日(金)~27日(日)		自然ふれあい交流館	共催
11	晩秋の森観察会志別コー ス	3日(日) 10:00~14:30	2日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	主催 昼食持参
	秋のありがと観察会	10日(日) 10:00~12:30	9日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	共催 ごみ袋・軍手・ 昼食持参自由
	西岡水源地自然観察会	23日(日) 10:00~12:30	22日(土)	西岡公園管理事務所 前集合・解散	主催
1	円山登山観察会	19日(日) 10:00~12:30	18日(土)	円山八十八か所登山 口 集合・解散	主催
2	冬の森の観察会	16日(日) 10:00~12:30	15日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	共催 昼食持参自由
3	森の中で春を探そう	23日(日) 10:00~12:30	22日(土)	自然ふれあい交流館 集合・解散	共催 昼食持参自由

※研修についての日程変更、内容についてはエゾマツ、はがきにて連絡します。

※下見は原則として前日とします、時間は本番と同じ時間です。

※集合場所 開拓の村は道立野幌森林公園 北海道開拓の村

※集合場所 交流館は道立野幌森林公園大沢口 北海道自然ふれあい交流館

ボラレンのホームページアドレス <http://hokkaidou.me/volaren/>

メーリングリストのアドレスは hbr-mi@fleeml.com

メールアドレスをお持ちの方でメーリングリストに登録されていない方は事務局へ。

事務局 室野文男 mail.fum-murono@hokkaidou.me

様似研修

- 1、期日：平成25年6月29～30日（土・日曜日）
- 2、目的
 - (1) 高山植物再生実験地のササ刈りをする。
 - 各自、鎌を持参（100円ショップで売っているもので十分です）
 - (2) リニューアルオープンしたビジターセンター見学
 - (3) 観音山・エンルム岬の植物観察
 - (4) 健脚組は、アポイ岳登山
- 3、宿泊場所：アポイ岳調査研究支援センター（様似郡様似町字平宇）
- 4、費用：ひとり 4000円（夕食・朝食・宿泊代・懇親会費）
- 5、日程
 - (1) 6月29日（土曜日）
 - 13：00 集合（アポイ岳調査研究支援センター）
 - 13：00～17：00 高山植物再生実験地事業ササ刈り・往復2時間、
 - 17：00～17：30 かんらん岩地帯の植物 講師：田中正人氏
 - 17：30～18：30 入浴・夕食と懇親会の準備
 - 18：30～夕食と懇親会・アポイファンクラブとの懇親会
 - (2) 6月30日（日曜日）
 - ①健脚組はアポイ岳登山 ●8：00 アポイ岳調査研究支援センター発
※非常食1食分、軽度のおやつ持参
 - ②観察組 観音山・エンルム岬の植物観察・ビジターセンター見学

道北研修

- I、期日：平成25年7月20～21日（土・日）
- II、研修目標
 - 1、大雪山お鉢カルデラ生成と古大雪湖誕生、層雲峡柱状節理誕生の現場を歩いて研修する。
 - 2、遠軽町埋蔵文化財センター、黒曜石産出現場の見学・黒曜石誕生の火山活動
- III、講師
 - ・大雪山お鉢カルデラ関連 中谷 良弘氏
 - ・黒曜石関連 遠軽町埋蔵文化財センター職員
- IV、研修場所：層雲峡・白滝村
- V、研修日程
 - 1、一日目（7月20日）
 - (1) 13：00 集合：層雲峡黒岳ロープウェイ駐車場
 - (2) 13：20～16：00 研修（お鉢カルデラ生成と層雲峡柱状節理）
 - (3) 16：30 宿泊地 小栗さん山小屋へ出発
 - 2、二日目（7月21日）
 - 9：00～12：00 遠軽町埋蔵文化財センターで研修・黒曜石産出場所で研修
 - 3、持ち物
 - ・寝袋持参・その他宿泊に必要なもの
 - 3、会費： 4,000円（夕食・朝食・宿泊代・懇親会費）

十 勝 研 修

- I、期日：平成25年6月1～2日（土・日）
- II、集合場所 帯広市児童会館<帯広市緑ヶ丘2・緑ヶ丘公園内にあり>
- III、研修目標
「ケシヨウヤナギ」を見よう
- IV、研修場所
・岩内自然の村周辺・ケシヨウヤナギ群生地・帯広市野草園
- V、研修日程
1日目（6月1日）
13：00 集合： 帯広市緑ヶ丘公園の帯広市児童会館
15：00～16：00 自然の村周辺の観察
17：00～18：00 夕食準備
18：00～19：00 夕食・懇親会
<宿泊地>岩内自然の村バンガロー 帯広市岩内町704 帯広駅より車で50分
2日目（6月2日）
9：00～11：00 ケシヨウヤナギ群生地訪望・記念写真・仙峽橋
13：00 帯広着 昼食（児童会館食堂で）
～15：00 野草園観察 児童会館で解散 記念写真
- VI、会費
・バンガローなどの施設使用料・夕食と朝食・懇親会費

鶴 川 研 修

- 1、期日：平成25年7月12～13日（金・土）
※この実施日は仮のものです。参加団体の都合により変更もあり得ます。その場合は、再度、お知らせします。）
- 2、集合場所：鶴川道の駅「四季の館」
- 3、日程
1日目（7月12日）
13：00 集合：鶴川道の駅「四季の館」
13：30～16：30 鶴川河口の植物・野鳥観察
2日目（7月13日）
9～12時 人口干潟の草刈りをしよう。
※ネイチャー研究会 in 鶴川・室蘭開発建設部・室蘭工大学生・ボラレンなどが参加。
- 4、持ち物・服装
鎌・軍手・長靴・作業着・作業のしやすい服装・寝袋持参・その他宿泊に必要なもの

追記 これらの諸研修について

- 1、参加者募集は、後日、ハガキでご案内します。
- 2、参加申込みは、研修部長 小林英世宛です。ハガキに電話・メールアドレスなどが書かれていますから、利用してください。
- 3、参加の際、車の相乗り希望者は、小林に申しつけて下さい。手配します。



2013年小樽支部自然観察会予定表

(北海道ボランティア・レンジャー協議会小樽支部)

No	月/日(曜日)	行き先	行程	見どころ	集合場所・時間(担当リーダ)
1	5/8(水)	オタモイ～赤岩山	オタモイ交番～ ノイシュロスホテル	春植物	小樽市総合博物館と共催 オタモイ交番前 9時 (梅原)
2	6/8(土)	旭展望台周辺	商大～松山町 展望台～船見坂	初夏の植物	中央バス商大終点前 9時 (工藤)
3	7/20(土)	徳舜警山～ ホコホコ山	旧日鉄鉱山跡	野草	JR小樽駅前交番前 5時 (北原) 自家用車乗合
4	8/24(土)	銭函天狗岳	登山口～山頂往復	初秋の植物	大倉山学院先 (登山口付近)9時 (北原)
5	9/21(土)	祝津・高島裏街道 (名所巡り)	手宮～高島～祝津	秋の植物 鯨塚・古代の地質	小樽市総合博物館前 9時 (北原)
6	10/19(土)	塩谷丸山	塩谷駅～山頂往復	紅葉・キノコ	JR塩谷駅前 9時 (梅原)
7	2/22(土)	穴滝	穴滝往復	カンジキ (氷漠)	天神浄水場 (奥沢水源地向かい)9時 (工藤)
8	3/29(土)	春香山	桂岡登山口～春香山	カンジキ (根開け)	桂岡ラルズ駐車場前 9時 (北原)

参考

- ① 約1週間前、道新小樽版に集合場所、時間等を再掲します。
- ② 天候外の都合で、日時等変更する事もありますので事前に申し込願います。
- ③ 参加料は、300円、交通費は各自負担願います。
- ④ 自家用車の方はその旨連絡願います。(駐車場・乗り合せの可否等あり)
- ⑤ 問い合わせ等は、0134-34-3533
携帯 080-5593-3533 北嶋迄

「円山登山観察会」2013年1月13日

タイトル 「最年少が体験、森のリラックス効果」

札幌は1月に入り連日のように気温もマイナス、雪の多い日が続いていた。

もともと「自然観察」とまではいかないが、野山を歩いたり野鳥を見つけたりするのは好きで夏場はよく出かけている。しかし冬になり自由業の僕は、自宅でぼちぼち仕事をすることに慣れ、野外活動とは無縁の日々…身体も精神も完全にコタツのネコ以下になりかけていた。

そんな状態を知ってか知らずか、主催する北海道ボランティア・レンジャーとしても活動している大先輩から、今回の「円山登山観察会」の情報をいただき、参加することになりました。

当日は青空が広がり、気温はもちろんマイナスだけど太陽の日差しが少し暖かく感じる。

こんな清々しいお天気に恵まれただけで気分は既に80%成功、後は無事にスタート地点に戻ってくればいいのだ。

今回の自然観察会に参加した目的は大きく2つ。1つ目は自分と妻の気分転換&運動不足の解消。前者はスタート地点で概ね達成していたし、僕が息子(約9kg)をだっこして歩くことで有酸素運動を、妻も短時間だが子供が手から離れて自然を楽しめる一石二鳥。

2つ目の、そして最大の目的は1歳を迎えたその息子に、北海道の冬の自然に触れて欲しかったからだ。最近歩き方を覚え、危なげに、でも楽しそうに歩く姿を見て、もしかしたらそろそろ自然の中で小鳥を目で追ったり、枝から雪が落ちるのを見て不思議に思ったりするのではないかと、反応をひそかに楽しみにしていた。

つづら折りの道が短時間で高度を上げていく。よく考えてみると札幌に住んで約25年、円山に登るのは初めてだった。何気ない自然に足を止め、レンジャーさんの解説に耳を傾けると、聞きなれない木の名前やその生態など身近な自然のことを意外と知らないと気づかされる。

歩き始めて10分、息子も森の匂いを吸い自律神経が刺激され、きっと目を輝かせているかと思いきや、あっさりと親の期待を裏切って夢の中…。どうやら刺激よりも、森を満たすリラックス効果の方が勝っていたようだ。

のんびりと自然に触れながらついに円山初登頂！雪に覆われた白い街を眼下に眺めると、参加者の皆さんにも自然と笑顔がこぼれていた。いつの日か息子に今日の事を話しながら、また家族で参加したいと思った。

最後に、誘っていただいた先輩はじめ、親切に声をかけていただいた参加者の皆様に心より感謝致します、ありがとうございました。

おわり

2013年1月22日
文/平沢 芳史

毛無山登山植物観察会(25/2/23)

毛無山は、小樽市、標高548. 2mの山です。

毛無山の語源はアイヌ語で山林の意。山肌を縫うような国道393号が小樽からキロロ、赤井川村に抜けている。

私たちは、国道沿いの雑木林の中を、毛無山展望台に向けて、カンジキやスノーシューで歩いた。

22名の参加者、途中北海道ワインの工場近くを登ったようだが、林の中からは、人のしゃべりや車の騒音はまったく感じない。2時間程で毛無山展望台に到着、前日までの吹雪が、嘘のように晴れ上がり、小樽市のほぼ全域を見渡すことが出来た。しかし展望台は、吹きさらしで寒く冷たいため、昼食は沢まで下りて食べるようにして、早々に下山することとなりました。(毛無山展望台は、国道沿いに位置し、小樽市、小樽港が眺望できることから、昼夜を問わず、観光客の人気スポットとなっている。)

吹きさらしの展望台 寒風に早々に下山することに、沢に下りてから食事にしよう。



展望台からの眺望 雪の多い今冬、つかの間の晴れ、石狩湾と小樽港



夕方から雪の予想、青空の下に雪雲が石狩湾を被い始める。



後方に毛無山、開墾地か？、なだらかな丘陵地
だいぶ下って来た。遅れている友を待つ



ミズキ 山地に生える落葉高木

枝は放射状に出て、葉は階段状になる。互生、枝の色が、紅紫色～暗紫色で
縁起物に使われることから、正月の繭玉のかざりを作る「木」



植物観察会

主な樹木は、

トドマツ、アカエゾマツ、ドイツウヒ、カラマツ	マツ科
ドロノキ、ヤマナラシ	ヤナギ科
オニグルミ	クルミ科
ケヤマハンノキ、シラカンバ、ウダイカンバ、	カバノキ科
ミズナラ	ブナ科
ヤマグワ	クワ科
ホウノキ	モクレン科
ノリウツギ、ツルアジサイ、イワガラミ	ユキノシタ科
ナナカマド、エゾヤマザクラ	バラ科
イタヤカエデ、ハウチワカエデ	カエデ科
ヤマブドウ	ブドウ科
シナノキ	シナノキ科
ハリギリ、タラノキ	ウコギ科
ミズキ	ミズキ科
ヤチダモ	モクセイ科

展望台から市街地を見下ろしながら、雑木林の中、稜線(尾根)を下る。積雪は風の通りになって、段々になっている。左側の斜面から風が上がってくるのか、尾根の右側は雪庇になっており危険だ。伸びの少ないミズナラが多い。やがて「この先は尾根が切れ落ちているから、右側の斜面にケツすべりで下りる様」に指示があり、90度方向を変えて、沢に下りた。そこは、ドイツウヒの造林地だ。戦後、伸びが良いということで植えたものだ。人間が手を入れた形跡はない。風が急に消えた。沢まで下りて昼食、12時30分位か。

低木や草本類は、雪の下になって何も見えない。

この山裾は里に近く、いたるところが、スキー場のゲレンデのようだ。かつて農地が広がっていたように思う。日当たりが良い斜面が多く、樹種が少なく、伸びも低い。かつての開墾地は、北海道ワインの工場の原料、「ブドウ栽培に活用していたら良いな」と思った。

振り返ったら毛無山稜線の先が切れ込んでいるのは、砂利採石場があるからだとかかった。

人が祠を造って、周りに木を植えたような小さな森がある。ドイツウヒ、ニオイヒバやアカマツが大きくなって、人の暮らしがあったことを感じさせる。戦後復員兵の家族が暮らしたのか。過ぎて行く時代、「年をとったな」と感じながら。ふと気付くと皆に置いていかれた。

国道を横切って、ゴール間直の山地を下り、民家がある道路に出た。途中、ミズキが真っ赤な一年枝の先に真っ赤な冬芽をつけていた。この場所では、人間の目に留まることはないと思う。なぜなら、クマイザサかクズの藪の上に雪が積もったような、ふっくらとした感じの積雪だ。雪が消える時期はもうすぐだが、人も近寄れない里山が広がっていると思う。先人の苦難の開墾の時代を思う。

アリで2時間観察会

北海道ボランティア レンジャー協議会 宮本 健市

ハチ目 ハチ亜科 有剣下目 スズメバチ上科 アリ科

和名=蟻 英名=アント アイヌ名=イトンナブ

2009年現在、世界では22グループ(亜科)があり約11500種が報告されていて、昆虫の中では繁栄している種である。日本では10グループ(亜科)で280種報告されている。そのうち北海道では62種で道央部では普通に見られるのは20~30種である。しかし、1、2mm程度と小さい種が多く、せいぜい大きな種を10種程度を同定できれば観察会には支障がないと思う。

アリは昆虫の仲間であるが昆虫は頭部・胸部・腹部で構成されているがアリは胸部と腹部を連結する部分に腹柄節(ふくへいせつ)があり種により形が異なるので種の同定の参考となる。

女王・働きアリ・雄アリで構成され社会生活をしている。雄アリは女王アリとの結婚飛行のときだけ出現し、交尾後はすぐに死ぬ。(ハチ目の所以である。)女王アリの寿命は長いもので20年程度、働きアリで2年程度とされている。

以下、数種を紹介する。

ムネアカオオアリ

働きアリで体長「以下体長は働きアリとする」12mmほどで大きいほうである。頭部と腹部中節~後端は黒、胸部と腹柄節・腹部前端は赤褐色が普通であるが黒色タイプもいる。

森林性のアリで巣は朽ち木の中、または生木の内部が腐朽したところに造り(針葉樹が多い)単独で昆虫などの餌を探して歩いているのを見かけることが多い。冬季はクマゲラが餌としていることが多くクマゲラの食痕近くの糞を調べると、殆んどがムネアカオオアリの死骸であった。

クマゲラはムネアカオオアリが住んでいる樹木を上空から見分けることが出来るらしく、手当たりしだいに樹木に穴を開けない。

クロヤマアリ

体長6mmほどで全身黒色である。平地~山地の明るい場所の土中(1~2m)に巣を造る。アリ道は造らず単独で昆虫などの餌を探しているのを良く見かけて最も普通に見られる種である。アスファルトの割れ目などどこにでも巣を造る。

アカヤマアリ

体長7mmほどで頭部と腹部が黒色、腹柄節と胸部・脚部が赤褐色で土中に巣を造る。3年ほど前に、ある観察会の下見を支笏湖休暇村でしていたとき、一つのアリの巣に赤と黒の2種類のアリが夏の暑い日にせっせと働いているのを目にした。帰宅後調べると赤い方はアカヤマアリで黒い方はクロヤマアリであることが分かった。さらに調べるとクロヤマアリはアカヤマアリの奴隷として働いていたのである。どのように連れて来るのか調べると成虫の首に縄をつけて連れて来るのではなく繭を誘拐して来ることが分かった。そうなると思つて現場を見てみたくなり、毎日のように手弁当でその巣に通って4日目の昼過ぎ、ようやく誘拐現場を目にした。その巣から7mくらい離れたところにクロヤマアリの巣がありアカヤマアリは一列に隊形を組みクロヤマアリの繭を誘拐しているではありませんか思わずクロヤマアリには申し訳ないが拍手をしてしまった。

クロヤマアリの繭はアカヤマアリの巣の中で一時保管されて孵化し自分が誘拐されたのも知らず、わが家と思ひアカヤマアリのためにせっせと働いていたのである。この行動を奴隷狩りといいサムライアリが特に顕著で巣の85%が奴隷という巣も確認されている。

クロクサアリ

体長5mmほどで全身黒色で光沢がある。指でつまむとサンショウの臭いがし黒くて臭いので付いた名。樹木の根の部分に巣を造り樹木にいるアブラムシに依存して生活している。樹木にアリ道（道しるべフェロモンを塗り）を造り一列に並び上に行ったり来たりするアリを見かけることがある。一度いたずらをして道しるべフェロモンを拭きとって見たことがある、アリはたちまち散り散りになり右往左往するばかりであった。

また道しるべフェロモンを塗る時は染み込むのをふせぐため、あらかじめワックスを塗るらしい。このアリから抽出した道しるべフェロモンを円状に塗布して放したら、いつまでも円の上を回っているらしい。

このアリは観察会の絶好の対象で上に行くアリと降りて来るアリでは、お腹の大きさが違うのである。降りて来るアリはアブラムシの甘露をお腹いっぱいにしていて大きく、上に行くアリは巣に甘露を置いてきたのでお腹は小さいのである。

エゾアカヤマアリ

体長7mmほどで頭部と胸部・脚部は赤褐色で腹部は黒色で比較的明るいところに枯れ草や落ち葉を集めて直径1mほどの大きな塚を造りその中に巣を造る。（ガラマツ林に多い。）むかし勇弘原野でハスカップ採りに夢中になり塚の上にいることも知らずにいたら全身アリだらけという苦い経験がある。10年くらい前は良く見かけたが最近が開発などにより少なくなった。

石狩海岸のエゾアカヤマアリは、おそらく世界中でもっとも大きなコロニーとして知られ塚が45000個確認され1つの集合体を形成している。

その他

- * シロアリはアリと名がつくがゴキブリの仲間
- * 巣穴で生活をするためカビには敏感で胸部からカビを予防する液（カビキラー???)を絶えず壁に塗っている。
- * 雨が降って巣の中の湿度が上がると巣の中に敷き詰めてある土を天気の良い日に巣の外に出して干し乾くと、また巣の中に入れる。（布団干し???)
- * アリの触角はくの字に曲がり前方に向き仲間と情報交換がしやすくなっている。
- * 植物の種子散布に一役かっている。エンレイソウ・エゾエンゴサク・オドリコソウ・フクジュソウなどにはアリの好むエライオゾームという物質がついていてアリは種子を巣の中に運び入れエライオゾームを食べると種子を巣の外に捨てる。昆虫などの殻も捨てられるので種子は肥料付きとなり良く育つ。エンレイソウがアリの巣穴を中心に直径1mくらいの円になっているのを見かけたことがある。山火事の多いところでは巣の中で山火事から種子が守られるらしい。
- * 童謡にアリさんとアリさんがゴツツンコというのがあるが触覚で情報交換と栄養交換（コロニー臭の交換）をしている。アリは同じ種でも他の巣から連れてきたものを放すとけんかになる。
- * 道しるべフェロモンは餌を探しに出かける時は点々につけ餌をたくさん見つけて帰巣するときは直線につけて仲間に知らせる。
- * アリの巣で生活する昆虫もたくさんいて「好蟻性昆虫」とか「蟻客」などと呼ばれゴマシジミが知られている。
- * サクラ・オオイタドリなどの植物は蜜腺から甘い蜜を出しアリに与える代わりに害虫から植物体を守ってもらっている。
- * 女王アリは雄と交尾して精子嚢を受け取ると一生で産む卵に使う。
- * 羽アリはハチと区別が難しい。

アリだけで2時間くらいは観察会ができそうである。

まだまだ調べるとおもしろい新発見があるかも知れませんが皆さんも注深く観察されてはいかがでしょうか。

「たかがアリされどアリである。」

自然について

えのきどかつみ

私たちは、昔、子供だった時代に農村風景は普通の情景だった。自然豊かな田舎は、野原や水辺、林や里山で、小鳥や虫や小動物、草花や樹木と親しく接することは、当たり前のことだったし、ましてや、日々成長する感性や情感を豊かにしてくれる最大の教科書だった。自然の中で風に吹かれて野山で遊んだこと、昆虫採集したり魚釣りをしたこと、仲間の友と川や沼や海で時を過ごしたこと、もし、これらがなかったとしたら、今、どんなに寂しいことだろうか。

でも、今の子供たちいや、その親たちにも、こうした経験がない時代を日本の教育や社会は作ってきてしまった。まだまだ間に合うと私は思う。

誰ひとりとして想像しえなかった大震災や原子力発電所の事故から早くも二年が過ぎた。多くの人が自分の死と自然の恐ろしさを考えた年になったのではないだろうか。

「もし、明日死ぬとしたら、今、絶対必要なのは何ですか？」ある会合で、そう問われたことがある。人それぞれに、その答えはあるだろう。改めて考えてみると、本当のところ、何が必要なのだろうか。

北の地では、いよいよ草木が芽吹く季節となる。自然とは”自ら然（しか）り”であり、あらゆることの生きる基本となる。ところが、冒頭にのべた自然体験や自然教育がいつの間にか、なおざりにされてきた結果、自然への畏（おそ）れを失ってきてしまった。

文明の中で、私たちは、たくさんのモノを与えられることに慣らされてきたばかりか、感動や感謝の気持ちをプログラミングすることを、失いつつあるように思われてならない。自然は、自らを発見し、行動し、そこに喜びを得られる気持ちを取り戻すもの、それは学力や知識とは全く異なるモードである。たくさんの情報が、本当に人を幸福にしてくれるのだろうか。私たちは、たとえ快適で便利出会ったとしても、どこかに本質的な不遜（ふそん）を宿しているのではないか。

福島原発の周囲の緩衝帯として植えられ、野鳥たちのすみかだった木々や森が次から次に伐採され、そこに放射性物質を含む汚染水タンクが増殖する。その姿を見る度に、本当にそう思えてならない。

古代人の智慧に思う

札幌市 高松 文雄

平成 25 年は出雲大社が 60 年に一度の大遷宮を迎え、伊勢神宮は 20 年に一度の式年遷宮が行われる。いま遷宮に熱い視線が注がれ、遷宮行事は大いに盛り上がっているという。

神仏には縁の薄い自分だがこの二大行事に遭遇出来るのは、これが生涯で最後と思われるので、その僥倖に感謝したい。そこで巷に目につく案内書等を頼りに式年遷宮をつぶさに学び、古代人の精神や労苦を偲びその信仰の深さや業績に触れることが出来ればと思う。

全国に約 8 万社存在すると言われる神社の中で伊勢神宮と出雲大社はその代表格である。アマテラス大神を祀る伊勢神宮は最も格式の高い神社とされ、内宮と外宮を中心に合わせて 125 の宮社から成るといふ。式年遷宮は 20 年に一度、8 年の準備期間をかけて正殿をはじめ建物一式をそのままで作替え、装束や神宝もすべて新調し、神座を遷すことである。

1300 年の長さにわたり解体と再生を繰り返され、建築技術や伝統工芸、もの造り精神が絶えることなく受け継がれて、今年はその 62 回目である。

一方、オオクニヌシ神を祀る出雲大社も多く社殿を持つが、本殿を囲む回廊の両側に並ぶ建物は 19 社を数える。24 メートルの高さを誇る出雲大社はその前は 48 メートル、更にその前は 96 メートル説もあり、実態は遺跡の証明をまたなければならない。

どちらも元をたどれば、はるかな神話の世界にたどり着く。創世記の神話が驚きである。伊勢の神様の国生みの神話は、日本列島を誕生させるというスケールの大きい物語だが、出雲の神様の国造りの神話は、これまた、日本のみならず外国・朝鮮からも土地を引っ張って来て縫い合わせる「国引き神話」の壮大さに圧倒される。

伊勢も出雲もまちそのものが神話の歴史の中にあり、今も息づいている。

年間 1500 に及ぶ神宮の祀りを守り続け受け継がれているという。

伊勢神宮にはおみくじがないそうである。たどり着ける事が大吉で、一生に一度何か月もかけて多くの人々が伊勢を目指したという。お伊勢参りである。

まちの人々はゆるぎない信仰の中に生き、全国から集まる参拝者を暖かく迎えてもてなすという。日本人の心のふるさとである。

なにごとのおわしますかはしらねどもかたじけなさになみだこぼれる (西行)

神話の森 伊勢神宮の広大な敷地は他を圧倒する神域である。伊勢市の四分の一を占める神宮の地の大半は森である。千古の杉が生い茂る神宮の森は清澄な水や空気を循環させ、多様な生命を育み里山の美しい風景のなかにいる時、人は神の存在を感じずという。しかし古代人の偉大さは千古の森に対し周到なビジョンを持っていたと思う。繰り返される式年遷宮の建築資材は全てこの森から切り出されたと思う。一般人の立ち入りは禁じ、50 年、100 年、1000 年先の需要に因應するため先人たちは命がけで森を守り、2000 年にわたり文化の継承に尽くしてきたと思う。古代人我らの祖先に敬虔な感謝を捧げたい。

桜 雑 感

三輪礼二郎

今年の北海道は異常なほどの降雪と寒気に襲われ、多くの人が除排雪に苦しんだだけでなく、道東では暴風雪のために悲惨な事故も発生しました。犠牲になられた方々に心からお悔やみを申し上げます。

今年ほど、道民の春を待ち望む気持ちの強い年はないと思います。しかし、厳しかった冬の寒さも和らぎ、春は確実に近づいています。小寒の頃はまだ小さく固かったオオカメノキの冬芽（花芽）も、立春の頃にはしっかりとした膨らみを持つようになっていました。そこで、駄句を一つ。

立春や木の芽にはかに力あり

春になると、日本全体が桜の開花を待ち焦がれるようになります。爛漫と咲き誇る桜の木の下で、観賞というよりは「花より団子」に打ち興じる人々の陽気な姿が毎年テレビの画面で紹介されています。桜の花はその美しさはもとより、本州ではちょうど入学式の頃に満開になることから、誰からも愛し親しまれる国花的存在（正式に定められてはいない）になっています。

私の子どもの頃は、ヤマザクラの咲く時期になるとご馳走を詰めたお弁当を持って里の山に登って食べるという風習がありました。これは私の郷里に限らず広く行われていた、おそらく「山の神」を祭る行事だったと思います（もし、行事名をご存知の方がおられましたらご教示ください）。

桜の花はこうして子どもの頃から、日本人の情緒の中にある共通のイメージをもって深く刻み込まれているように思われます。高校時代に習った三好達治の『鶯のうへ』では、美しい清楚な桜の花びらが健やかな「をみなご」に一枚また一枚と降りかかっている様子が描写されています。これが桜の花に対する一般的なイメージだと思います。

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかの鶯^{あしと}音空にながれ
をりふしに瞳^{ひま}をあげて
鬚^{かみ}りなきみ寺の春をすぎゆくなり
.....

(三好達治『鶯のうへ』)

ところが、大学時代に読んだ二つの小説、「桜の木の下には」（梶井基次郎）と「桜の森の満開の下」（坂口安吾）によって、私の桜の花に対するイメージは一変してしまいました。

桜の樹の下には屍体が埋まっている！これは信じていいことなんだよ。何故って、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。しかしいま、やっとわかるときが来た。桜の樹の下には屍体が埋まっている。これは信じていいことだ。

（梶井基次郎『桜の木の下には』）

男は満開の花の下へ歩きこみました。あたりはひっそりと、だんだん冷たくなるようでした。彼はふと女の手が冷たくなっているのに気がつきました。俄かに不安になりました。とっさに彼は分かりました。女が鬼であることを。突然、どつという冷たい風が花の下の四方の崖から吹寄せていました。

（坂口安吾『桜の森の満開の下』）

三好の詩と梶井や坂口の小説の桜の花に対するイメージの違いは一体どこからきているのでしょうか。学生時代には深く考えることもなかったのですが、還暦を過ぎて多少とも命というものに想いを致すようになった今では、なんとなく分かるような気がしています。

梶井の不安を呼ぶほどの見事な桜はソメイヨシノ以外にはありえないと、『桜誌』の中で著者の小川和佑は述べています。小川は坂口の桜については言及していませんが、小説の舞台は平安時代であるにもかかわらず、坂口の脳裏にあった桜はやはりソメイヨシノだったろうと、私は思うのです。

それに対して、三好の桜には不安も妖しさもなく、静かにハラハラと散っています。「鬘りなきみ寺」にあるのは古桜がふさわしく、ヤマザクラかあるいはエドヒガンだったのではないかと想像を楽しんでいます。

話を元に戻しますと、桜の咲く時期には日本列島が一種の狂気に覆われるといても過言ではないでしょう。私ごとを言えば、桜を愛でる風雅はもちろん、さしたる知識も興味も心身のゆとりも持ち合わせていなかったため、あの狂気をただ横目で見ていただけでした。しかし、数年前に弘前城の桜の花を訪ねて以来、桜に対する興味や知識が少しずつ増してきました。これからは時間の余裕もできそうなので、毎年その狂気の中に身を投じてみようと思っています。今年はどこへ行こうかと悩んでいます。

以下、付録になりますが、たまたままとめていた桜に関する事柄の一部をクイズ形式にしてみましたので、皆様にも楽しんでいただければ幸いです。

【サクラ雑学クイズ】

- 第1問 桜前線のスタートとゴールを飾る桜はそれぞれ何でしょうか？
- 第2問 日本で一番多い桜は何でしょうか？
- 第3問 ソメイヨシノは2種の自生種の自然交配によって生まれたとされています。その2種とは何と何でしょうか？
- 第4問 桜餅に主に使われる桜は何でしょうか？
- 第5問 一番長命だと考えられている桜は何でしょうか？
- 第6問 日本に自生していた桜は何種類くらいでしょうか？
(ア. 5種類 イ. 10種類 ウ. 20種類)
- 第7問 日本にある里桜は何種類くらいでしょうか？
(ア. 50種類 イ. 100種類 ウ. 200種類以上)
- 第8問 淡黄色い花びらの桜の品種名は何でしょうか？
- 第9問 淡緑色の花びらの桜の品種名はなんでしょうか？
- 第10問 桜は古来、多くの和歌に詠まれてきました。次に掲げる和歌の作者名を下欄から選んでください。

- ① 久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ
- ② 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
- ③ いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな
- ④ 敷島の大和心を人とはば朝日に匂う山桜花
- ⑤ ねがはくば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ

作者名欄

ア. 伊勢大輔 ^{さいま} イ. 在原業平 ウ. 西行 エ. 紀友則 オ. 本居宣長

【答】

第1問 桜前線のスタートは沖縄のカンヒザクラ、ゴールは根室のチシマザクラ（タカネザクラの変種）。根室市の清隆寺のチシマザクラは有名。

第2問 ソメイヨシノ。全国の約8割を占める。花も大きく、花つきもよく、葉が出る前に花が咲くので見た目は豪華絢爛である。

第3問 オオシマザクラとエドヒガンの自然交配種とされている。江戸の染井村の植木屋から「吉野桜」の呼び名で売り出されたが、明治期になって「ソメイヨシノ」と改名された。

第4問 オオシマザクラ。葉が大きく桜餅を包みやすい。桜餅の芳香は葉に含まれるクマリン（フジバカマの香りの元でもある）という物質が原因である。

第5問 エドヒガン。日本三大桜とされる根尾谷の薄墨桜、三春滝桜、山高神社桜はいずれも樹齢千年以上のエドヒガン（および変種）である。これに対して一番短命なのはソメイヨシノで50年程度の寿命といわれている。

第6問 イ。10種類。ヤマザクラ群（ヤマザクラ、オオヤマザクラ（エゾヤマザクラ）、オオシマザクラ、カスミザクラ）、マメザクラ群（マメザクラ、タカネザクラ）、チョウジザクラ群（チョウジザクラ）、エドヒガン群（エドヒガン）、ミヤマザクラ群*（ミヤマザクラ）、カンヒザクラ群*（カンヒザクラ）の6群10種。

ただし、ミヤマザクラかカンヒザクラ（中国南部や台湾北部に分布しており、沖縄は自生地ではないと考えられている）のうちいずれかを除いて、9種としている文献もある。

この10種にウワズミザクラ、シウリザクラ、イヌザクラと常緑のバクチノキ、リンボクを加えた15種としている文献もある。

第7問 200種類以上。300種以上といわれている。

第8問 鬱金（ウコン）

第9問 御衣黄（ギョイコウ）

第10問

- ① エ。紀友則
- ② イ。在原業平
- ③ ア。伊勢大輔
- ④ オ。本居宣長
- ⑤ ウ。西行

自然は、沈黙した。薄気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。裏庭の餌箱は、からっぽだった。ああ鳥がいた、と思っても、死にかけていた。ぶるぶる体をふるわせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、コマツグミ、ネコマネドリ、ハト、カケス、ミソサザイの鳴き声で春の夜は明ける。そのほかいろんな鳥の鳴き声がひびきわたる。だが、いまは物音一つしない。野原、森、沼地……みな黙りこくっている。

このように始まるレイチェル・カーソンの〈沈黙の春〉は、みなさんご存知の事と思います。1962年に出版された薬などの化学物質によって鳥たちが鳴かなくなったことを訴えた作品ですが最近、農薬が原因ではありませんが世界各地で夏鳥が消えつつあります。1999年英科学雑誌ネイチャーに掲載されたThe Second Silent Spring?ですが、玉田克己氏(北海道総合研究機構 環境科学研究センター)が身近な鳥、シマアオジを一例としてお話くださいました

シマアオジとはどんな鳥

L14~15 雄の夏羽では頭上、背、翼、腰は赤栗色で翼には大きな白斑がある。顔から喉は黒い。下面は鮮黄色でとてもきれいな鳥です。夏の北海道を訪れる「内地」のバードウォッチャーのお目当てはと聞けばかなりの割合で「シマアオジ」という答えが返ってくるだろう。鮮やかな黄色い腹と黒い顔、背中の中茶色というコントラストの効いた体は、見るものに強烈な印象を残す。生息地がハマナスやエゾスカシユリなどが咲き乱れる広々とした原生花園という背景もいい。こうした草原で見られる鳥の多くが、冬には本州以南にも渡って来るのにたいして、シマアオジは大陸回りのルートで南に渡ってしまう。まさに北海道でなければみられない鳥なのです。

シマアオジの減少実態と生態

つい20年ほど前までは、道北や道東の草原で普通に見られたこの鳥も、信じられない勢いで減少している。最近では滞在中について1度も姿を拝めずに帰ったという訪問者も珍しくなくなった。2004年末の鳥類RDBの見直しでは、それまで準絶滅危惧だったものが、一気に絶滅危惧IA類にまでランクアップしてしまいました。シマアオジの減少が話題にのぼり始めたのは、1990年代の初めころです。その傾向は不思議なことに、開発の進んだ道南ではなく自然度が高いと考えられていた道東やオホーツクの沿岸で目立っていました。そもそも、この鳥がよく見られる「原生花園」と呼ばれる環境は、その名に反してそれほど自然度は高くありません。かつて海岸沿いに生えていた丈の低いミズナラやカシワの林が山火事などで失われ、その跡に出来た草原に放牧が行われたり、藪を焼き払うための火入れが行われたりして出来上がった、

半自然とでも言うべき環境です。草刈りによって維持されてきた本州以南の草原と同様に、人が手入れをしないと植生の遷移が進んでしまうため、最近では観光客がまだ訪れない時期に手入れをしている所さえあります。見事なヒオウギアヤメの群落も、単に牛が嫌うための食べ残しに過ぎません。たとえ最果ての道東や道北であっても、人が使えないような湿原以外、平地の現生自然は見事なまでに姿を消しています。

シマアオジは、なぜ減った

以前はまだ、シマアオジが繁殖できるような草地在、河川敷や牧草地の周辺にも残されていて、彼らにとってはそんな環境でも十分だったのです。ところが1970～80年代にかけて道内では牧草地が急増し、河川敷はもとよりわずかな面積の草地も失われてしまったのです。さらには牧草を刈る時期が早くなって、そこで繁殖していた鳥たちが巣ごと草刈り機に巻き込まれてしまったのです。

また、現象の原因は日本だけではないようです。かれらは冬になると中国南部からマレー半島に至る東南アジアへと渡るが、近年経済発展の著しいこれらの国々では、開発による自然破壊が問題になりつつあります。とくに

シマアオジが越冬している平地の湿地や草原といった環境は、真っ先に工業用地に姿を変える危険性が大きいのです。さらに渡りの経路にあたる中国では、この鳥が食材として人気があり、大量に捕獲されているとも言われます。シマアオジを「空の朝鮮人蔘」として10万人が食べている。またライスパードとして闇市で売られたりお米を食べるので、人間が食べてしまうともいわれる。その他に缶詰にしてシンガポールやアメリカに輸出されているともいわれる。

日本は鳥のすみかを埋め立てて工業化したおかげで経済成長を遂げてきたのであるし、30年まえまではシベリアから渡って来るツグミなどをカスミ網で捕っては食べていました。それを考えると、これらの国の人々が現在の日本並みに環境保全への意識を持つようになるまで、じっと待つしかないのかもしれないかもしれません。もっとも、その程度の意識で自然が守れるかどうかは疑問ですし、それまでにシマアオジが絶滅しないとは、誰も保障できませんが。

シマアオジの行政的位置付けと行政の希少種対策

レッドデータブック(RDB)は、野生生物の絶滅を防ぐことを目的に、生息の現状を把握するための情報をICUN(国際自然保護連合)がまとめたものです。その歴史は古く、最初に発行されたのは1996年にさかのぼり、内容については定期的に見直されています。名前の由来は、最も絶滅が危惧される種類についての情報が、赤い用紙に印刷されていたことに因みます。ICUNは、自然の保護と適切な利用を進めるために、1948年に創設された国際組織で、各国やその政府機関、市民団体などが会員です。日本が加入したのは1978年で、ICUN日本委員会があり、主に国内の連絡協議を行っています。日本版RDBについて2002年度版ではICUNの評価基準をもとに7つのカテゴリーに改定されシマアオジは2012年に絶滅危惧Ⅱ類(VU)・・・39種=絶滅の危険が増大している種(亜種)に指定されています。

キツリフネの増殖計画

登別・内田 尚志

3年前、キツリフネを道路端に見つけた時、まだ在ったのかと懐かしく思うと共に、貴重なものを入手できたことが嬉しかった・・・というのが、今回のキツリフネの増殖計画の発端である。

場所は、登別温泉の石水亭側、天然足湯入口付近である。石水亭を過ぎ、やや坂の市道を行くとヘアピンカーブとなるが、そのカーブのところ天然足湯入口がある。また、近くにバス方向転換のための旋回場所および妙慎寺への出入口もある。道路沿いにはガードレールが敷設され、道路外側には川との間にやや平坦なところがあり、トチノキの大木、やや太いオンコ、橋のタモトにカツラの木、その他カエデ類がある。天然足湯に行くには、舗装された市道入口から右に折れ、未舗装の道路を行き、トチノキ、カツラの脇を通り、クスリサンベツ川に架けられた木製の橋を渡る。山道のような歩道を川沿いに行けば、約150mで足湯エリアである。ガードレールを含め車道側が市道、従って、市の管理下にあり、ガードレールより外側が国立公園になるので自然公園財団（登別支部）の管理下にある。

最初にキツリフネを見つけたのは、かなり昔のことで、その後、何回か天然足湯に来ているが、近くでキツリフネを見かけることはなかった。そのため、すっかり忘れかけていたが、この度、ラッキーなことにキツリフネに再会できた。しかし、それも束の間のこと、数週間後に行った時は、キツリフネはほとんど無くなっていった。何でことはない、他の雑草と一緒に刈り取られていたのである。観光地であることから、草丈があまり高くないうち、毎年、時季が来れば、道路脇の草刈りを行っていたのである。何年も見ていなかったのは、その影響もあったのかもしれない。そこで、自然公園財団にお願いして、草刈り要注意の場所に支柱を立て、赤テープを張ってもらった。今年は、これ以上草刈りを行なわないで、様子を見ることにした。場所は足湯入口・ガードレールからトチノキの大木付近まで、歩道脇、数mの間である。

翌年1年間、様子を見た。思いのほかキツリフネが増えていることが確認できた。ガードレールの裏側付近に数株のキツリフネが、例の特徴的な黄色い花をいくつもぶら提げており、草刈りをしなかったことの効果が如実に現れていた。幸いなことに、天然足湯に行く道路を挟んだ反対側には、同様な形をした赤紫色のツリフネソウが数株、花を付けていた。これも、草刈りの時季が今までと違うため、花が見られるようになったものと思われ、まさに一石二鳥の効果だった。

そして去年、キツリフネが比較的簡単に増えることが分かったので、引続き様子を見ると同時に、キツリフネの範囲を市道沿いに増やすことを計画した。そもそも、以前、キツリフネソウを見たのはもっと坂の上の市道ワキであったことを思いだした。草刈りさえ注意すればまた増えるであろうと想定し、市道脇の草刈り方法を市道の担当部署・都市整備部土木グループと相談した。市としては具体的な作業に関しては対応しかねるとのことであったので、自分でやることになった。

7月下旬にキツリフネの生育状態を確認しながら株数え、キツリフネの生育範囲を決めた。位置は天然足湯入口から市道約110m上方、生育範囲は約60m、株

数は28株であった。この頃になると、草丈は10~15cm程度に、葉はかなり大きく、特徴も明瞭になり、まず他の草花と間違えることはない。そして、天然足湯入口付近と市道生育指定範囲の草刈り・ササ刈を、時間をかけて少しずつ行なった。開花ー結実をまって種を採取し、10月末に、その種を撒布した。1ヶ所数個ずつを計60ヶ所。

以上が、今までのキツリフネの増殖計画の経緯である。キツリフネ、ツリフネソウに関しては、私が知らないことがまだまだ沢山あり、手探りで行ってきた。キツリフネソウの閉鎖花について詳しい本²⁾が出版されていることを知ったのも最近のことである。去年のツリフネソウは、葉っぱが何ものかに斑点状に食い荒らされており、生育もままならなかった。何ものによるものか追求も残った課題である。ともあれ、今年はキツリフネおよびツリフネソウがどのような成長を見せてくれるか楽しみである。

なお、図鑑によれば、キツリフネの生育地は梅澤の『低地~山地の湿ったところ』²⁾、谷口・三上の『山すその湿ったところ』³⁾、佐竹らの『山中の湿地にはえる』⁴⁾とあるように、湿地のイメージが強いが、山裾ないし斜面の裾という意味で湿り気の多いところかも知れない。しかし、今回の生育場所を見ている限りでは、湿地とは思えない。むしろ、“山裾ないし林縁の日当りのよい場所”と思われる。今回のキツリフネは草刈りで人為的に一緒に除去しないことで、生育を促し、増やしてきた。その意味で今回の場所は“生育適地”であると考えられる。機会があれば、他のツリフネソウの仲間を含め、生育地を是非見てみたいと思っている。

<参考>日本のツリフネソウ科の植物²⁻⁵⁾

種	色	分布	在来 / 帰化	現認
◎キツリフネ	黄	北海道	在来	登別
○ウスキツリフネ	薄黄	北海道	在来	?
△アカボシツリフネソウ	———	———	帰化	—
◎ツリフネソウ	赤	北海道	在来	登別
○シロツリフネ	白	北海道	在来	登別
◎ハガクレツリフネ	———	———	在来	—
○エンシュウユリフネソウ	———	———	在来	—
△オニツリフネソウ	———	———	帰化	—
△ハナツリフネソウ	赤+白	北海道	帰化	札幌 ^(*)

(凡例; ◎; 種、○変種 / 品種、△帰化植物)

<注> (*): 札幌市北区、地下鉄南北線・北12条駅付近、クラシックな民家の庭に咲いていた(2012・9・29)

<参考資料>

- 1) 矢原徹一 : 『花の性』(1995)、東京大学出版会
- 2) 梅澤俊 : 『北海道の花』(2007)、北海道大学出版会
- 3) 谷口・三上 : 『北海道の野の花 最新版』(2005)、北海道新聞社
- 4) 佐竹・大井・北村・亘理・富成 : 『日本の野生植物II』(1982)、平凡社
- 5) 清水建美 : 『日本の帰化植物』(2003)、平凡社

札幌市南区周辺の自然

江別市、千葉 到

この近郊は雄大な自然に恵まれた観光スポットが多く存在しますが、その主なものを記述します。

石山緑地公園：かつては札幌軟石の石切り場であり、今は彫刻、野外ステージがあり、岩肌をむき出した岩石は迫力のある独特の景観を呈しています。4 万年前の支笏湖の大爆発により火砕流が厚く堆積し、地下内部の熱で再溶解、凝結し（溶結凝灰岩）現在の固結した柱状節理が形成されました。軽く、細工がし易く防火、耐寒用の建築石材として利用され、現在、札幌市資料館、時計台の石垣、小樽運河倉庫群 等で見る事が出来ます。

果樹園：石山から定山溪にかけては13軒もの果樹園、農園があり、フルーツ産業が盛んです。農産品、リンゴ、ブドウ、サクランボ、それらのジュース、ジャム等の加工品が生産され、多くの市民も訪れ、食を豊かにしています。

サッポロカイギョウ：2003 年、藤野地区豊平川河床で、新第三期中新世後期の砥山層（とやま層）の泥岩～砂岩から、化石が発見されました。およそ820万年前のジュゴンの仲間です。この時代中新世から鮮新世にかけて多くのカイギョウ化石が太平洋岸西域（日本）から出ますが、近郊では珍しい発見です。



サッポロカイギョウ
(札幌市博物館活動センターパンフより)

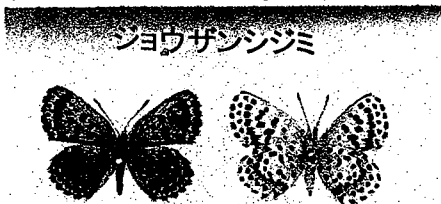
温泉群：札幌の奥座敷、定山溪温泉は余りにも有名です。1886年（慶応2年）行脚僧、美泉定山が土地の人の案内で、河畔から湧き出る湯を見つけ、浴場を開いたのが始めとされています。およそ300万年前の熱水鉱脈で温められた自然湧出泉で、豊平川を挟んで16件程の旅館・ホテルが立ち並び、年間200万人の観光客が訪れています。北海道で一番熱量の大きい自然湧出泉です。また定山溪西方近くに小金湯温泉があります。明治初期から市民に親しまれ、現在2軒の旅館が存し閑静な所です。豊平川の瀬音や鳥のさえずりを聞きながら、情緒豊かな温泉です。手前の旅館前庭にある樹齢700年のカツラの大木はシンボルになっています。

豊平峡ダム：昭和47年完成のアーチ式コンクリートダム。新第三期の安山岩溶岩の急崖斜面に形成され、洪水調整、水道用水、水力発電として利用されています。堤高102m、堤頂長305m、堤体積285千m³、大都市に1日528千m³の用水を供給し、渇水期には必要水量を確保調整しています。年間10万人の観光客があり、観光放流も人気の的で壮大なものです。

豊羽鉱山：300万年前の熱水鉱床があり、日本有数の鉛、亜鉛、硫化鉄鉱を採掘していました。残念ながら価格競争、坑内状況から2006年（平成18年）に閉山となりました。坑内温度が非常に高く、切羽で使用するダイナマイトが融解、使用しにくく、また労働環境も厳しくなってきました。しかし、液晶に使用するインジウム、金等の希少金属の資源もあり、新しい掘削技術が開発されると再復活する可能性もあります。地熱発電計画も考えられています。

八剣山：豊平川の上流にあり、南側に札幌岳、空沼岳、回って中山峠、無意根山、余市岳、朝里岳、そして手稲山と標高1000m以上の分水界が囲み、その中央部に標高498mの八剣山があります。北海道100名山の一つです。豊平川流域には険しい地形が分布しますが、これらは500万年～300万年前の火山活動で出来たものです。麓には砂岩、泥岩などの堆積岩が分布し、これは800万年位前の海底に堆積したもので、豊平川の河床部で観察されます。八剣山はこの堆積岩を貫いて新しい岩脈（溶岩）で作られた山です。登山口は3ヶ所あり、一時間弱で頂上に達し、360度の眺望は素晴らしく、多くの山ガールにも楽しまれています。融雪期のみですがラフテング、また乗馬体験、果樹園でも楽しめます。川の上流部は高さに応じて、エゾマツ、ダケカンバ、エゾイタヤ、シナノキ、カツラ、シラカンバ、ヤチダモ等が分布し、麓の小川には絶滅危惧種のニホンザリガニが生息しています。

昆虫類：八剣山周辺の東は石狩低地帯線（河野線）があり、大きい動植物相の境界になっています。南は黒松内低地帯のブナの北限、且つ幾つかの昆虫相界にもなっています。丁度この地域は両相に挟まれ、オオイチモンジ、

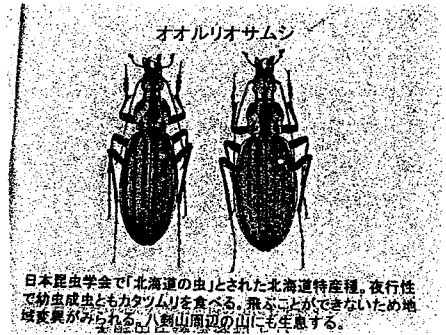


幼虫は岩場に生えるキリンソウやベンケイソウ類を食べる。
幼虫はアリと仲がよくお尻の蜜腺から蜜を分泌してアリに与える。
分布は極めて局所的。八剣山の岩場に生息する。

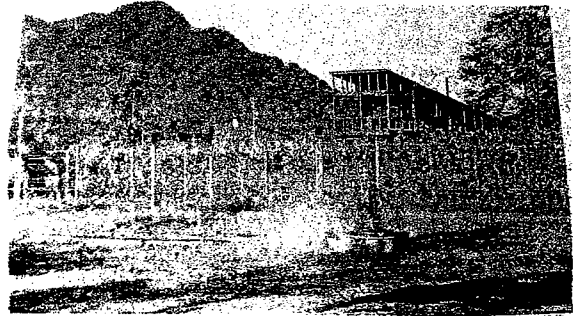
エルタテハが見られますが、何と言ってもジョウザンシジミが貴重です。八剣山周辺にはジョザンと名のつくのが多いです。幼虫の食草はガレ場に生えているキリンソウで、アリと共生、分布は極めて局所的で生態の記録が少なく解らないそうです。

やはり有名なのは日本の国蝶であるオオムラサキです。エゾエノキの葉を食べ、その周辺にしかいません。成虫はミズナラなどの樹液を吸っています。生育区域は少なく、個体数も減少しているようですが、八剣山はその生育範囲に入ります。

また昆虫はオオルリオサムシです。昆虫学会では北海道の虫とされています。夜行性でカタツムリを食べますが、羽が退化して飛べないので地域ごとに変異があるようです。最近、ヒメオオクワガタも見つかっており、エゾチッチゼミ、オオミスジ他八剣山周辺は貴重な生育場所になっています。



八剣山ワイナリー：札幌市街地中心から国道230号線で22km、車で30分、ワインカラーの2F建の造醸所に到着します。2011年、設立に参画、(株)さっぽろ地ワイン研究所(南区砥山194番地-1)です。豊平川上流左岸、第四期更新性の南向きの高位段丘面に位置し、表層は扇状地性の砂礫質土壌、水はけの良いブドウ栽培地です(フランス・ボルドー近郊に類似)。所有地には各種の品種、欧州系カベルネラン、ケルナー他15種を試験植付けし、向後寒冷地に適した品種を本格栽培していきます。



5年後には地元産80%以上にする予定です。自社製の井戸を掘削(60m・飲料適)、良質な冷涼水を確保しました。手造り、小規模生産を目指し、赤、白、ロゼ、その他スパークリング、アップルワイン、シードル、リンゴジュース、そして炭酸水等生産しています。各種試飲も出来ますのでご来遊お待ちしております。

大通り直売所：中央区南1条西6丁目〈西向き〉、センチュリーヒルズ1F

・ 夢カフェ まーくる内 011(219)4255、

URL：<http://www.hakkenzanwinery.com>

以上

地球環境問題の逆転の発想

川床 博康

「ハンバーガーを食べると地球の酸素が無くなる」こんな話を聞くと誰しも「?!」と首をかしげたくなる。実は、世界の森林伐採は、ファーストフードが原因だという。

牛肉100%のハンバーガーを大量生産するためには、多くの牛を一度に育てなければならぬ。それだけの広い土地を地価の高い先進国に確保することができないので、熱帯雨林を伐採して土地を広げ、安く牛を飼うそうだ。考えてみたら鶏肉・豚肉より高価なはずの牛肉で出来た製品が一つ数十円で手に入るというのは誠に奇妙な話である。松阪牛は一头3000万円で落札されるという。しかし安い土地、安い餌、安い人件費で牛を飼えば、自然破壊と引き換えに都会の私（私の大好物）を含めた人間（特に若者）は飽きるほどのハンバーガーを毎日でも食べることが出来るわけだ。その結果、森林が消え、大気中の酸素が減り、地球の温暖化が引き起こされる。ファーストフードの需要が無くならない限り事態は決して良くなるまい。

割箸をやめて自分の箸を持ち歩いても、発砲スティロールの容器を廃止してゴミを減らしても、ハンバーガーを食べる事を止めない限り、環境汚染は続くのである。けれども若者達は、我慢が出来ない。友達と映画を見た帰り、月に数千円の小遣いで、レストランには、入れない。コンビニでおにぎりを買っても座って食べる場所が無い。数百円で楽しく満ち足りた気分になれるファーストフーズレストランが無かったら、若者の憩いの場所が台無しになる。これを食べると環境破壊に繋がると言われても「自分自身一人が我慢したって世界が変わるわけでもない」と思ってしまう。環境問題のポスターを見て少々気が滅入るのは、「保存運動」は快適ではないからだ。昔の生活に戻ることはそのまま不便を意味する。リサイクルは手間がかかる。自然エネルギーは効率が悪い。そしてなによりいけないのは、地道な努力が時として大きなプロジェクトの前に無駄な努力として片付けられる事である。必死に節水やゴミの分別、緑を残そうとする活動中にふと目にする無作為な宅地造成や高層マンションの建設は、何と無力感をかきたてることであろう。結局自分もチェーンレストランの恩恵を受けながら文明の副作用の片棒をかついくのか・・・という面白くない結論に傾きかけたりもしてしまう。そのような世界の矛盾を解決するために私たちは過去の生活に戻るべきであろうか。自然の摂理のもとで夏は暑く、冬は寒いことをあるがままに受け入れ、自給自足で暮らすことが最善の道なのか、理想はおそらくそうであろう。しかし現実問題として私達は昔の生活には、耐えられないであろう。昔に戻る事は文明から後戻りを意味するのでは・・・

今の日本で舗装されていないぬかるみの道を歩き、蠅の飛び交う部屋で食事をし、雨水を貯めて使う生活となるとやはり二の足を踏んでしまう。

恐らく先進国の誰もがそうであろう。そして途上国の人々も又、今の生活に満足している

わけではない。終戦直後の日本がそうだったように・・・

快適で便利な文明生活を知れば、そちらを選ぼうとしても誰も責められない。環境破壊を続けながら楽しい人生を享受してきた人々に、「あなたたちは我慢しなさい。私たちがもう地球を汚してしまったから・・・」とは言えない。

しかし、今の生活を守りながら、矛盾をかかえたまま暗闇の中に進んでいくことが良い事であるはずがない。どこかで「発想の転換」を試みなくてはならない。環境破壊の諸悪の根源のように言われている地球温暖化。解決の道が見つからないのであれば「暖めない」ことよりも「暖まってしまったものを冷やす」事の模索が必要では・・・

温度が上昇することは「熱」の存在を意味する。「熱」＝エネルギーである。地球全体の温度を上げてしまうほどの膨大なエネルギーを、抑え逃がす事を考える一方で地球の資源が足りないと思えば、その「熱」自体をエネルギーとして再び取り入れる事は、出来ないだろうか。少なくとも自然まかせではなく緑を増やす事くらいは出来るのではないか。気温の上昇。それを引き起こす二酸化炭素。オゾン層破壊による多量の紫外線。どれもこれも悪の根源のように云われているが、よくよく考えてみれば、これらは私達が必要としている「緑」を育てるのに必要なものばかりである。これらを逆手に取って今度はいくらでも緑を増やしていくことが出来る、と思うのはあまりにも素人考えなのだろうか。

しかしあらゆる発明・発見は夢物語から生まれた。今では日常使っている携帯メールも、ある機械音痴の女性が「こんなものを作りたい」と言ったことから始まったという。

今の状況は、識者達が額を寄せあい「困った・困った」と言っているばかりである。

先進国と途上国、生産者と消費者、専門家と一般人といった対立の構図ではなく、皆が同じ方向を見ることが出来る試みが。そしてその為の痛みならば喜んで分かち合いたい。

今までの過ちを無条件で楽に解決出来る方法は無いであろう。しかしタダやみくもに「皆でハンバーガーの不買運動をしよう」というナンセンスな活動ではなく「環境破壊をするハンバーガーならいらぬ」と意思表示をしたいものである。100年かけて失ったものは100年かけて取り戻す覚悟も必要である。

後戻りしない次世代の未来の為に。そして何よりも、後悔のない「今」の時代を生きる為に

遊歩道について

◎ 別冊をエッセイ
（3巻）

遊歩道とは…広辞苑（第4版）によると、「散歩のために作られた道路。散歩道」とあります。

ネットで検索して見ましたが、いろいろな言葉といろいろな定義があり驚きました。

遊歩道という言葉で括られた道に対して、皆さんの認識はいかがでしょうか？他の道との違いとは何でしょうか？改めて考える事にしました。…私の住む礼文島は歩く島、また花の島と言われる毎年何十万人という人達が訪れるところです。まさに昔からフットパスアイランド！8時間コース、4時間コース等歩くところがたくさんあります。多くの人達は何年も続けて来島され、季節を変え、花々と景観を楽しまれております。20年とか30年とか長いお付き合いの方々がたくさんおられます。島に住むものとしてはありがたい事で、道の存在としてはこの上ない喜びだと思えます。しかし、残念ながら最近になり利用が多くなると同時に問題もまた少しづつ増えて来ているという現実もあります。その問題とは何かと言いますと、今回テーマにした遊歩道が関係してくるのですが、道はたくさんあるのに歩けなくなっている道がどんどん増えてきているという問題です。それぞれ所管の行政機関は協議会など立ち上げ維持管理に向け努力されている様ですが、なかなか上手く機能していない様にも思われます。礼文島へ行けばたくさん歩くところがあり熊や蛇もいないので安心してどこでも歩ける。そしてたくさんの花達や絶景に出会える事が出来る、そう伝え聞いている方々が多い事だと思えます。しかし、立ち入りが出来ない箇所も少しづつ増え、ロープを張り立ち入りを制限している場所も多くなって来ている昨今です。それは自然保護、植生復活という観点からするととても大事な事です。管理と責任、人が道を歩くと必ず付きまとう社会管理、自然公園法では遊歩道以外を外れて歩いてはいけないとあります。自己責任だからと言って何処でも歩いていいという訳ではありません。その法律で歩く人を整理し管理する事は可能です。しかし、その法律だ

けでは括れない道の存在もまたあるのではないのでしょうか…。山菜を採りに行く道、岬の上に出て見たいと思う道（観光ではない、リクリエーション的意味合い）木を植えるための作業道路など（林野庁以外）…。その遊歩道とは認定されない道についてどう歩く人達との折り合いをつけて行くのか？それが問題になっている様に思われます。歩いてはいけないと云う事で処理するのは簡単です。しかし、道を見つけるとその先に行きたくなるのも人情です。そこを歩く事により法律違反だと思いながら歩く人達はどれ程いるでしょう？管理している方々は腕章をつけていると発見したら上から目線で諭す！遊歩道以外を歩く事に対する罪の意識とはどれ程のものなのでしょう？…ダメなところを無理に何とかしろと言っているのではなく、何とかできないものかと問題を論上に上げるためにはどうすればいいのかと云う事なのです。…つまり次の一步を一段上の状態で話し合いが必要という事なのです。

過去に更科源蔵さんの北海道の旅という本の一説に宝石をちりばめた島と讃えられました。かつての礼文島はそれはそれは美しかったのでしょうか…。勿論今現在も花達は健在で、それ程景色的には変わってはいないと思います。が、やはり昔から比べると少しずつ変化をしているのも事実です。昔1日に1便しかなかった稚内からの定期船が今では1日4便です。旅行形態や交通の便が最近随分様変わりをしました。ハイカーの増加、特にエコツアー等歩くツアーが激増した様に思われます。礼文島の道は年を追うごとに広がり、傷み、道端の植物がどんどん枯れて行くという悲しい現実があります。この事は決してハイカーが悪いとかツアーが悪いという事ではなく、遊歩道として公に歩いていい道なのですが狭い道ゆえすれ違いなどで生じるダメージを改善するルールがないという事です。管理等についても情報を共有しそれぞれの機関が維持管理等についての温度差がある。そんなところに問題がある様に思われます。不勉強ゆえ島以外ではどうなっているのか情報を持ち合わせてはいません。もしかしたら礼文島だけの問題なのかも知れません。皆さんの地域ではいかがでしょうか？遊

歩道とその他の道との区別、道に対する管理機関等での情報の共有、歩く人達の環境教育の向上、どの様にされているのでしょうか？…

個人的な理想とすれば環境教育先進国に学び、歩く人達の環境意識が向上し（歩く前にレクチャーを受ける時間をつくる）、自然保護という認識が誰の心にも定着し（自然保護、環境教育等のアナウンスがもっと必要）、管理体制が継続的に確立され（コース等への人数制限、一方通行等の設定）、時代を超え人々に愛される道（子供達に早い時期からの環境教育等）…そんな事を踏まえ、より多くの人達に遊歩道等の定義づけがなされればと思います。

歩きたい、歩かせて上げたい、見たい、見せて上げたいと思う気持ち、そんな気持ちに答える道と人との関わり、より良き方向へ…。今後の発展に期待したいと思います。



台湾玉山

小林 英世

玉山（ぎょくざん、ユイシャン、ピンイン：Yù Shān、ウェード式：Yü Shan）、旧称新高山（にいたかやま）・モリソン山（Mt Morrison）は、台湾のほぼ中央部に位置する山。標高は3,952mと台湾で最も標高が高い。周囲は台湾自然生態保護区となっている。また1985年4月6日には玉山を中心とした約10万haの範囲が玉山国家公園に指定されている。

日本統治時代には明治天皇により富士山よりも高い「新しい日本最高峰」の意味で新高山と名づけられた。しかし皮肉にも台湾で最も遅くまで日本に抵抗したのは新高山の周囲に住むブヌン族の「郡蕃」と呼ばれる一群であり、新高山南面の荖濃溪上流部は1933年になってようやく日本の実質統治下に入ったが、1932年には南方の大関山駐在所が襲撃され、日本人警察官3名が殺害された（大関山事件）。1934年には東方のラクラク溪上流部で日本人警察官が殺害された（玉里事件）。また1941年にははるか南方の北糸園溪畔の駐在所が襲われ、日本人警察官ら3名が殺害された「内本鹿事件」が発生するなど、新高山周辺では終戦にいたるまで日本人側からは「蕃害」と呼ばれたブヌン族による抵抗運動が多発した。

富士山の標高3,776mよりも高いことから、日本の台湾領有期には日本一標高の高い山として知られ、日本の学校でも「日本一の山」として教えられていた。また1937年には新高阿里山国立公園として日本の国立公園に指定されていた。

1941年12月2日に発令された日米開戦の日時を告げる海軍の暗号電文「ニイタカヤマノボレー二〇八」のニイタカヤマとは当山の事であるといわれているが、当時の海軍の通信符号表には“ニイタカヤマ”は登載されておらず確証はない。

11月17日15:20分千歳発台湾桃園空港行きエバー航空BR0115便に乗り一路台湾を目指す。19:00桃園空港着、迎いの台湾山岳協会のガイドの林さんと合流。この日は台北市内の台北帝王飯店に宿泊、荷物を置いて安着祝いでホテルの近くの食堂に入り台湾ビールで乾杯。翌日は、台北から車で高速道路を經由して阿里山駐車場へ向かう。途中サービスエリアでトイレタイム。昼食は嘉義中信飯店、個室にて昼食、台湾式の回転テーブルで昼間っから豪華料理と台湾ビールと紹興酒！登山なんだか宴会なんだか？阿里山までの道が33曲がりなんて代物をはるかに超えている。いったい何回曲がったやら？熱帯から亜熱帯、温帯へと垂直分布を見ながら進む。バナナ、椰子から檜へと変化していく。日曜日と有り凄く数のバスとすれちがう。つづら折の道路をひたすら走って漸く阿里山の駐車場に到着する。急峻な山間にここだけが平地となっている。

一帯は阿里山国家森林レジャー区となっていて、多くの観光バスやマイカーが駐車している。周りには20軒ほどのホテルが建っている。車は駐車場に置いて、ホテルから迎えるワゴン車でホテルへ入る。ホテルに泊まった観光客は早朝3時頃、阿里山駅からトロッコ電車で玉山からの御来光を見に向かうのが一般的ようだ。

11月19日、今日は快晴。阿里山駐車場より30分程で玉山林道入口の上東埔に到着。ここから5分程歩いて塔塔加（タータカ）警察分隊所に到着。登山許可書の確認のあと、排雲登山指導センターにてパスポートのチェックを受ける。ここでトイレタイム。歩くと1時間ほどの距離2.7キロの登山口までワゴン車で送迎の便があった。

登山口から正面に玉山前峰を見ながら歩きだす。尾根の上に出ること無く前峰、西峰と山腹を巻いて排雲山荘(3400m)まで8.5Km 標高差800mを5時間ほどかけゆっくり登る。登山者数が制限されているのに加え、排雲山荘建て替えのため山で宿泊できないので人に会うことも少なく静かな山歩きとなる。

鬱蒼とした冷杉タイワントドマツ（モミ）の林が続く深い森林帯の切り立った斜面に穿たれた登山路を進む。笹に覆われて見えないが断崖絶壁で落ちたら危険な所ばかり、見えていたら足が竦む、孟禄亭で最初の休憩。金翼白眉（キンバネホイビー）という人慣れした鳥が近くまでくる。ここにはちょっと離れてトイレがある。途中には500m毎に標識があり、有り難いやら有り難くないやら、白木林休息ステーションにて休憩、昼食の海苔巻き弁当を食べる。昨日の昼食場所嘉義中信飯店製の弁当、量が多い！ここで下山してきた人達が休憩していた。林さんの友人ガイドが私たちの弁当殻を回収してくれ、お湯までいただく。ここで目の前に聳える玉山の絶景を楽しむ。次は大迫壁で休憩、林さん曰く落石が有るから手前で休めとの事、そそり立つ岩壁、空を隠すほどに切り立った一枚岩が登山路に迫る。変質砂岩の岩肌には、波紋の跡や海中生物の化石が見られ、かつてここが海の中だったことを教えてくれる。

大迫壁から1時間程で排雲山荘に到着。やはり3300mを超えると呼吸が乱れてくる。かなりゆっくりのペースで進んでくれる。後続のメンバーらは40分遅れで到着。排雲山荘は建設途中で宿泊が出来ないと、国の許可が下りないらしく、11月中のオープン予定だったが、来年4月まで延期との事でした。排雲山荘で休み、ここではみかんの差し入れがあり、美味しくいただく。今日の宿泊場所圓峰山屋を目指す。今回台湾鉄道局、台湾山岳協会、玉山国家公園管理处の配慮で2泊3日の滞在と圓峰山屋での宿泊の許可を頂き、3650mの宿泊となった。山屋5時到着を目途に南峰三叉路を目指す。夕日に映える玉山が赤く染まり綺麗だ。周りは雲海！3500を超えるとかなりキツイ、林さんはスローペースで私達を誘導してくれる。南峰三叉路でほぼ富士山とほ

ほぼ同じ高さ3760m、ここから200m程下り圓峰山屋到着。圓峰山屋は公務2人、宿泊者15人の定員制で、畳1畳程に1人といったスペース。先に食料と寝袋を運んでくれたコック兼ポーターのお兄さんの世話となる。着くなりお湯の提供を受け、夕食となる。かなりのボリュームの料理を提供してくれる。高山病にかかったメンバーもおり早々とシュラフの友となっていた。高山病予防のため酒を控えたほうが良いらしいが、山に入って飲まないなんてこの人生の中で無かった！やはり安着で何人かで軽く飲む。翌日に備え早々と就寝。少し頭が痛い軽い高山病かも？高度順化のためにゆっくりとしたスピードで過ごす。夜中に表にトイレに起き、空を見上げれば、満天の星！オリオンが北海道とは違う形に傾いている。さすが南国！天の川も見える。明日の天気を期待して寝袋に潜り込む。

翌日知ることとなるが、ソーラー発電で、水は雨水を貯めていた。もっと驚いたのは昔の白雲小屋の様にトイレは小屋の周りですしていた。自分もうんを踏まないようにして用を足しに向かう。

11月20日、希薄な空気のせいかはたまたイビキのせいか昨夜は熟睡出来ず、体調は今ひとつ優れない。朝ご飯は軽めにお粥と付け合せが何種類か用意してくれていたが、たくあんの漬物が美味しい。昨夜の天気がガラリと変わり朝から濃いガスに覆われている。天気の回復を待ってみるが回復の兆しがなく、予定より遅く出発。普段は通らない稜線上のコースを辿る。途中切れ落ちている場所が何箇所か有り、晴れて視界が良ければかなりの高度感で足がすくむと思われる。高山病で下痢のメンバーは何度となく場所を探しマーキングに余念がない！頂上近くは褶曲運動の圧力と、厳しい気象条件で風化した急峻な岩場となる。ゆっくり歩いて来たが、遅れているメンバーのサポートにガイドの林さんが降りていったので、先頭を歩き頂上を目指すこととなる。何箇所か鎖場を通過する。しかし鎖が冷たい！なるべく触らないようにしたいがそこは崖の途中、やむなく掴む、大きな岩峰を超えるとほどなく頂上、ついに3952m玉山の頂上、感無量である。ちょっと目頭が熱くなる。しかし、視界は殆んど無く残念である。記念写真を撮って10分くらい待っていると後続のメンバーが上がってきた。社長より頂いた隊旗を広げ皆で記念撮影、携帯エリアなので登頂の報告を札幌の本社に入れる。

台湾でも百名山登山(百岳登山)が盛んなようで玉山前峰・玉山西峰・玉山・玉山東峰・玉山北峰・玉山南峰・南玉山・東小南山・鹿山等30山以上の百岳山群がこの玉山付近にあるという。因にガイドの林さんは玉山500回、台湾100名山が80峰、富士山5回、田部井淳子も案内しているベテランガイド。ガイド判断で今回予定していた東峰、北峰は悪天候のため諦めて下山となりとても残念でならなかったが安全第一！

稜線沿いのルートは危険が多いため、隊長が降りたくないとのことで、排雲山荘に下る一般ルートで圓峰山屋を目指す事になる。頂上から急な登山道を鎖を頼りに下山していく。このコースの方が登るにはキツイ感じがした。途中落石防止の覆道を通し、ジグザグの登山道を降る。落石小心との表記、数人の登山客とすれ違うが外国人はいない。圓峰山屋分岐で休憩し圓峰山屋に向かう、登りとなると高度が高いので呼吸が粗くなるのでゆっくりと進む。13時過ぎ圓峰山屋着、大名登山なので小屋に着くと烏龍茶とお湯が用意してあり、昼食に持参したカップ麺を食べる。ガイドの林さんとコックのお兄さんにも差し上げてみたが、蕎麦を食べたことが無いらしく興味を持って出来上がりを待っていた。味は美味しいと言っていた。夕食まで時間がありやる事が無いので軽くウイスキーを飲んで昼寝となる。夜はからすみをおかずに元気なメンバーで酒宴となり林さんと台湾の山の登り方等手続きの方法を聞きながら会話していたが、もう寝ようの声で8時にお開き、就寝となる。

11月21日今日も朝から霧と雨、11時の迎のワゴン車到着の時間に合わせるため6時発、排雲山荘では生姜茶のおもてなし、冷えた体が温まる。ありがたやありがたや！

休憩だが雨宿り程度しかできないが椅子も提供してくれる。休息後ひたすら登山口を目指して進む。時々見える水墨画の様な景色が慰めで、後はガスの中。大迫壁に着いてまじまじと見るがすごいスラブの一枚岩に改めて見入ってしまう。登山道脇の植物を探すが開花しているものが秋のせいかな少ない。林さんは植物のことは全然わからないガイドでした。白木林休息ステーションにて休憩、視界が殆んど無く登ってきた日とはまるで違う景色、休息後ひたすら雨の中登山口を目指す。孟禄亭で時間調整して11時予定どおり登山口着、ワゴンに乗り、排雲登山指導センターに行き、烏龍茶の接待を受ける。着替え等を済ませ徒歩で上東埔の駐車場に向かう。

運転手の王さんが出迎えてくれ、一路昼食場所の塔塔加游客中心レストランへ向かい昼食兼安着祝い、林さんが排雲山荘より連絡を入れ王さんが買ってきてくれた台湾ビールで乾杯！今夜の宿泊地東埔の沙里仙飯店に向かう。途中良くこんな所に道を付けるなと思うような道路を下っていく。工事中の道路を工事の邪魔にならないように下るといった感じ、お国が変わればいろいろあるものと感心する。断崖絶壁の道路を下だり、人里に降りてくると、トマトの畑が多い。台湾の田舎の景色を楽しんでいるうちにホテルに到着。東埔、ここは温泉地で温泉・男湯・女湯の漢字があり、なんとなく日本を感じる。ホテルにも温いが温泉があり、水着着用らしいが、誰もいないので日本スタイルで入浴、体を洗うのはシャワールームでした。入浴後温泉街の散歩に出るが、すぐに外れに来てしまう広さ、お土産屋を覗くと大量の干しきのこが売っている。車で運ぶしか方

法がないような大量さで、600元と安い値段だった。ホテルに戻り夕食、レストランは台湾人で大騒ぎ状態、この雰囲気食事と思いきや、ホテルの計らいか地下室に食卓を設けてあり、そこで、ガイドの林さん、運転手の王さんを交えた夕食となる。夕食後レストランを覗いてみると、日本の歌をカラオケで歌って大賑わいだった。その晩から吐き気とともに下痢に悩まされ、後半は酷い旅行となる。

翌日は和社の水里に有る玉山国立公園管理處に表敬訪問し、處長の游登良氏並びに秘書の方と新高山登山口の復刻記念碑の前で記念撮影し、玉山の見える場所で見返りの玉山を見て、本日の観光地日月潭に向かう。日月潭で湖と寺院を見学し埔里のレストランでまたもや円卓を囲んでの食事、朝からの下痢で食欲もないが、何品か食べてみるが、あまり受け付けない、またトイレのお世話となる。高速をひた走り台北に戻り、台湾山岳協会に行き、玉山登山証明書を台湾山岳協会理事長の何中達博士から直々に受け取る光栄に預かる。記念写真を撮り今日の宿泊場所FXホテルに向かい、兄弟飯店の飲茶の梅花廊にて、台湾山岳協会の理事張玉龍先生との食事会となる。翌日からは台北市内観光と台湾鉄道局との交流となり、8泊9日の玉山登山旅行を締めくくりました。

コースタイム

11月19日

9:05 登山口発→9:52 孟禄亭→11:51 白木林休息ステーション→13:12 大遺壁→14:21~15:00 排雲山荘→15:30~16:13 主峰分岐→16:36 交通部雨量計→17:15 圓峰山屋

11月20日

5:00 起床→7:00 圓峰山屋発→7:17 圓峰山屋分岐→8:33 3765m休憩→9:00~51 玉山主峰→10:47 排雲山荘分岐→11:46 圓峰山屋着

11月21日

5:00 起床→7:00 圓峰山屋発→6:37 排雲山荘分岐→7:00~20 排雲山荘→8:41 白木林休息ステーション→塔塔加登山口

森林浴の勧め

苫小牧市 谷口勇五郎

10数年前まで現職の時、週末には決まって自宅から数km離れた川に出かけ、1時間ほど散策しました。川の流れや音、林の木の葉の揺らぎや緑を見れば、すっきりした気分になり「もう1週間がんばれるぞ」と思いました。職場・家族・病気・将来のことなど、生きている限り大小さまざまなストレスがあります。適度なストレスは生活をより豊かにするものと考えら



木の肌触り

れているようですが、過度のストレスが問題になります。(ストレスの感じ方や対処する能力は個人差があるそうです)。強いストレスが長く続くと処理し切れず病気にもなると言われます。ストレスの解消法は、人と話す・旅行・音楽・笑い・お酒を飲む・ジョギング・散歩などそれなりの効果はあると思います。

私は森林浴を勧めます。この言葉は「自然観察ハンドブック」にもあるように、1982年、当時の林野庁長官の造語と言います。森林を散策すれば、安らぎと癒し、爽快な気分が得られるという実感です。視覚では美しい風景(花・鳥・緑…)、聴覚では森の静けさ・せせらぎ・さえずり・虫の声、嗅覚ではフィトンチッドなどの森の香・花や土の香、触覚では土や落ち葉の感覚・木の肌触り、味覚では木の実・キノコ・山菜など、五感で感じたものが絡み合っていると思います。(諸要因のヒトへの効果は一様ではないでしょうが)。

最近になり、生理的な測定により、森林浴後の唾液中のコルチゾール(ストレスホルモン)濃度の減少、血糖値の低下、脈拍や血圧の低下、NK(ナチュラル・キラー)細胞の活性と免疫グロブリン濃度上昇など、森林浴による生理的リラクゼーション効果や免疫機能の向上効果が科学的に分かってきつつあります。

2003年、森林セラピーという言葉が作られました。森林セラピーとは森林浴がもたらす生体反応を生理的に測り、森林の効能を科学的に裏付けることにより、森林環境を利用して心と体の健康維持・増進・疾病の予防を行うことを目指すものです。現在、全国に約50ヶ所の森林セラピー基地が認定され、森林散策コースが整備され、森林浴を効果的に行う指導や健康の維持増進のための助言をする、森林セラピーガイドや森林セラピストの配置、宿泊施設を持ち、営業が始まっています。北海道では2ヶ所(釧路・津別)に出来ています。

しかし、遠くの基地まで出かけるのは難しく、効果は余り変わらない近くの森林に出かけ1時間ぐらい散策すれば、爽快な気分になり、しかも免疫力が高まると思います。*自然観察会に参加すれば、森林浴を行い更にガイドとのやり取りを通して脳が活性化すると思います。ガイドの方は下見や下調べをするのでその効果は一層高いと思います。



環北地野許第 110314001 号

平成 23 年 3 月 14 日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会長 春日 順雄 殿

北海道地方環境事務所長 吉井 雅彦



特定外来生物の防除について（認定）

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（平成 16 年法律第 78 号）第 18 条第 2 項の規定に基づき、貴殿の申請について次のとおり認定する。

申請年月日	平成 23 年 3 月 2 日
特定外来生物の種類	オオハンゴンソウ
防除の区域	北海道立野幌森林公園の全域 (別途図面のとおり)
防除の期間	(防除の認定日) から 平成 33 年 3 月 31 日まで
防除の方法	計画的な防除として、抜き取りを行い、適切に処分する。 (詳細は別紙「防除実施計画書」のとおり)

北海道立野幌森林公園のオオハンゴンソウ防除実施計画

1. 特定外来生物の種類

オオハンゴンソウ *Rudbeckia laciniata* (ルドベキア・ラキニアタ)

2. 防除を行う区域

北海道立野幌森林公園の全域 (別掲「区域図」の通り)

3. 防除を行なう期間

認定の日～平成33年3月31日

4. 野幌森林公園内における生育状況、分布について(区域図参照)

野幌森林公園は試験場、戦後開拓による農地化、北海道開拓の歴史の中で様々な利用がされた場所であり、オオハンゴンソウはどのように侵入拡大したか不明である。オオハンゴンソウは戦後開拓による農地化された部分に分布し(瑞穂連絡線、中央線、下野幌線)また2004年9月の台風18号の被害を受けた植林地に拡大を始めている。

5. 防除の目標

(1) 生育の拡大地域において継続的な防除を実施し被害の低減化をはかる。

(2) 防除効率を上げるために、今後の防除方法の確立をはかる。

6. 防除の方法

(1) 調査

野幌森林公園と周辺地域におけるオオハンゴンソウの生育状況を調査し、生態系にどのような影響を与えているか、他の植物との関連の中で調査を行う。

(2) 採取の方法

オオハンゴンソウの採取の方法について手抜きを原則とするが抜けない場合は補助器具(スコップ、草取等)を使用する。

(3) 採取個体の処分

根と花を茎から切り離し、ゴミ袋に入れ、江別市のゴミ収集車で運搬し焼却処分を行う。
他の部分は防除区域内に積み上げ堆肥化する。

(4) 採取の際の留意事項

①採取時は軍手を着用するなど、けがや事故の発生防止に万全の対策を講じる。

②会員にオオハンゴンソウの正確な同定を行なうために特徴を熟知させ、一般参加者に在来の野生植物を採取しないように指導する。

③従事者等による個人的な持ち帰り及び野外への放置のないよう監視を強化する。

④防除従事者に対し防除の内容を具体的に指示するとともに、適切な防除と安全に関する知識及び技術を確保することとし、別記1、「野幌森林公園オオハンゴンソウ防除従事者台帳」を作成し、「北海道ボランティア・レンジャー協議会」で管理するとともに、原則として毎年4月に更新する。なお、必要に応じ随時更新できるものとする。

⑤一般市民に採取に関する誤解を与えないよう作業区域には、「オオハンゴンソウ防除作業実施中」の看板を掲示すると共に、外来生物法に基づく防除を実施していることを証する別記2「野幌森林公園オオハンゴンソウ防除従事者証」を携帯し、地域住民や散策者に説明を求められた場合には、防除の趣旨について説明する。

(5) モニタリング

毎年のオオハンゴンソウの生育状況を適切にモニタリングし、防除の進捗状況を点検するとともに、その結果を防除の実施に適切に反映するように努める。

7. 関係者との調整など

(1) 防除地域の土地所有者との連絡・調整について

- ・道有林・道有地は空知総合振興局森林室、北海道開拓記念館との調整は合意済み。
- ・国有林は石狩森林管理署、石狩森林環境保全ふれあいセンターとの調整については合意済み。

(2) 集合場所等としての、北海道自然ふれあい交流館との連携については合意済み。

(3) 焼却処分：江別市廃棄物対策課との連携については合意済み。

(4) 当該防除における財政的及び人員の確保について

- ①当該防除における費用は、北海道ボランティア・レンジャー協議会の会計で処理する。
- ②人員の確保について、北海道ボランティア・レンジャー協議会の会員と一般市民、土地所有者（協力）を考えている。
- ③植物生態系の保全及び防除に関する技術の習得は事前の北海道ボランティア・レンジャー協議会会員による研修会でその徹底をはかる。一般市民へは北海道ボランティア・レンジャー協議会の会員が自然解説し周知徹底する。

(5) 当該防除の周知

一般市民への当該防除の周知と参加を促すため、当協議会のホームページは勿論のこと、様々な広報媒体によるPR活動を行う。

北海道新聞 Web、まんまる新聞、自然ウォッチングガイド、エコポロ、北海道環境財団 Web に掲載予定

(6) 科学的知見の充実

野幌森林公園に隣接する酪農学園大学野生動物保護管理学研究室などと連携し、オオハンゴンソウに関する科学的知見を入手し、オオハンゴンソウの防除活動に反映させる。

8. 以上の他、防除の実施にあたっては、関係法令を遵守するものとする。



～ 事務局便り ～



<お知らせ>

① これまでボラレン主催の観察会は一般参加者のみ行事事用保険に加入しておりました。しかしボランティア活動中に他人に対して損害を与えたことによる損害賠償問題が発生した場合に対応できるように、ボラレンの観察会や研修会に一度でも参加を予定している会員はボラレンの費用でボランティア活動保険に加入することができます。

加入希望者は「ボランティア活動保険」の手続きをしますので、“エゾマツ”に同封のハガキで申し込んで下さい（締切り4月10日まで）。

② 総会と総会前の研修会について

平成25年度 第28回定期総会

日時 4月20日（土） 13:30～16:45

受付 13:00～

場所 札幌エルプラザ2階 環境研修室

研修 13:30～15:00

総会 15:15～16:45

研修会は講師の井口博貴氏が「自然保護教育の本当の姿は自然の美に気付かせることだけではなく、人間が破壊した自然の醜にも気付かせるべきである。と共に自然と人間との関わりあいを広い視野で見、共存すべき持続可能な開発の精神が必要なのである」という“ニューエコロジー”に関し講演して下さいます。

③ 自然ふれあい交流館と共催の観察会における下見時における話題提供は以下の通りです。今年度講師をして下さる会員にご協力いただき、ベテラン、初心者、ともに話題を共有して研鑽を積んでいきたいです。

4月24日（水）	道場 優さん	「鳥について」
5月11日（土）	田村允郁さん	「森林のタイプ分け」
6月 8日（土）	宮本健市さん	「寄生昆虫（ツチハンミョウなど）」
8月 7日（水）	春日順雄さん	「セリ科 シシウド属（Angelica）の性表現について」
9月 7日（土）	五十嵐一夫さん	「スズメバチへの備え」
10月 9日（水）	土屋忠司さん	「未定」
11月 9日（土）	小林英世さん	「未定」
2月15日（土）	新谷良一さん	「かつての野幌原始林」
3月22日（土）	熊野美子さん	「冬芽」

編集後記

- ・表紙はクローズ・千鶴子さんにステキなカットを描いてもらいました・
- ・「自然ふれあい交流館」の啓発員の扇谷真知子さんが、多忙にもかかわらず、私たちの活動をあたたかく評価してくれた文を寄稿してくれました。ありがとうございました。
- ・礼文町で活躍されている新山彦司さんから「遊歩道」というテーマの貴重な報告をいただきました。この題名はなじみにくいようですが、礼文島ならではの貴重な内容をもっています。この島は高山植物の宝庫で、私たちを魅了させてくれますが、その保全・保護には、この遊歩道がとても重要な役割をしています。できれば新山さんの案内で花の島を歩いてみたいものです。
- ・千葉到さんは「札幌南区周辺の自然」というテーマで、八剣山の周囲の自然に触れられ、そこで「さっぽろ地ワイン研究所」設立に参画されています。豊穡な地で醸造された美味しいワインを昨年の忘年会に飲ませてもらいました。皆さんも是非、飲んでみてください。
- ・研修部長の小林英世さんが台湾で最も高い山「台湾玉山」を踏破されてきました。富士山より少し高い山で、とても面白いエピソードが書かれています。
- ・今回も多くの方々から素晴らしい原稿をいただきました。自然を広く深くそして優しく観察されています。編集していて楽しいです。スペースの関係上、今号に掲載できなかった原稿は夏季号に載せる予定ですので了解を願います。
- ・今年度の定期総会は、案内にもあるように4月20日（土曜日）に行われます。
＜札幌エルプラザ＞で、
13：30分から研修会、15時：15から総会、総会終了後、懇親会
- ・今回は国際的にも多くの仕事をされた井口博貴さんを講師に迎えています。楽しみです。ぜひ参加してください。
- ・なお、詳細に関しては案内のハガキ、最後のページにある「事務局便り」などを参照して。
- ・観察会の前日に行われる下見の研修会をはじめ、十勝、鶴川、様似、道北などでの観察、研修会などに参加して、親しみ楽しみながら学んでいきましょう。
- ・次号・夏季号は6月末発行予定です。6月15日までに広報部、北広島の佐藤まで原稿を願います。一層、充実したものにしていきたい。

『エゾマツ』 春季号 104号
2013年3月25日 発行
会長 春日 順雄